

---

# Gemini

南 晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Gemini

### 【Zコード】

Z2860U

### 【作者名】

南 晶

### 【あらすじ】

自分のことを男だと思っている僕の双子の妹、優。女の子にモテモテのカリスマギタリストだ。

外見だけは全く同じなのに、内気な銀縁メガネの草食系男子の僕、良。

凶暴で身勝手な優に気弱な僕はいつも翻弄されてきた。

ある日、ライブで出会った女の子を好きになってしまった優は、自分の正体を偽る為に僕を身代わりにすることにした。バレない訳ないだろ・・・?

絡まる恋の行方はどこに行くのか。  
禁断の兄妹シリーズ第4弾です。

## 1話（前書き）

Gemini (d? ? m? n? ?) = 双子座、双生児、ラテン語で  
双子

禁断の兄妹シリーズ第4弾、お楽しみ下さい。

それは友達に連れられて行つた、町内の夜店。こんなチープで意外な所で、あたしは運命の恋に落ちた。この街に来て、2年が過ぎた梅雨の週末だった。

大学に入学してから、あたしはこの街で一人暮らしを始めた。古い木造の学生寮は、部屋にトイレはあるもののお風呂は共同で、快適とは言い難い。でも、あたしはこの静かな街が気に入っていた。

運動が苦手なあたしは、合唱クラブに所属して、ピアノの伴奏を担当していた。歌うことさえ苦手だつたからだ。

極度の対人恐怖症に赤面症、特技は引き籠ること。

もちろん、友達なんていなかつた。

ましてや恋人なんて、自分には生涯、縁の無い話だと思つてた。

そんなあたしを憐れに思つたのか、数少ない友人があたしを町内の夜店に誘つてくれた。

地元出身で、自宅から通つている彼女はこの街の情報は何でも持つていて、おいしいケーキのお店ができたりすると、いつもあたしを誘つてくれる。

あたしなんか誘つて面白いのか分からぬけど、彼女の好意には感謝していた。

「美咲つてさ、まだ彼氏いない訳？」

その友人、加藤千春は串に指した鳥のから揚げを齧りながらあたしを振り返つて聞いた。

商店街に所狭しと並んだ、露店の中央をあたしがキヨロキヨロしながら、歩いていた。

綿アメやタコ焼き、イカ焼き、懐かしいB級グルメが軒を連ねて並んでいるのは圧巻だ。

薄暗い外気の中でここだけは煌々と光を放つていて、幻想的でさえあつた。

あたしが返事をしないので、千春は頬を膨らませてノロノロ歩いていたあたしの所に戻つてきた。

「もう、人が聞いてるのに。こんなん、珍しいモンでもないじゃん。

「あ、そうだね。でも、なんか懐かしくって……。」

あたしは少しオドオドしながら笑つた。

少し乱暴だけど姉御肌のこの友人が、あたしは好きだった。

「で、せつきの質問だけど、彼氏いないの？」

ニヤニヤしながら、千春は同じ質問を繰り返した。

期待に沿えないのが申し訳なくて、あたしは肩をすくめる。

「それがいらないんだ。今まで付き合つたことないの。男の子苦手だ

し。」

へええと、面白がつて千春は言った。

「かわいいのに勿体無いなあ。あたしの友達、紹介しようか?」「大丈夫。今のトコ興味ないし・・・。」

それは本当だった。

あたしは目立つことなく一人で静かに生きていくのが人生の目標だつたから。

その時。

闇をつんざく物凄いハウリングが響いた。

あたしも、周りにいた人達も思わず、耳を押さえる。

それに続いて激しいドラムの音と、お腹の底に響いてくるベースの音。

コンサートでも始まつたみたいだ。

「面白やうじやん。美咲、見にいー!」

エネルギーで好奇心旺盛な千春は、あたしの腕をグイと掴んで音のする方向に向つて走りだした。

露店が並ぶ商店街の終点に小さな公園があつた。

音はそこから響いてくる。

若い男女が既に公園を埋め尽くして、音楽に合わせて飛び跳ねている。

激しいロックだ。

聞いた事ない曲だから、このバンドのオリジナルなんだろうか。

あまり興味のあるジャンルではなかつたけど、あたしは有無を言わせない千春の迫力に気圧され、飛び跳ねている群衆の中に引きずり込まれていく。

公園の中央に即席の櫓が設置されてて、バンドメンバーたちは安定感のないその上で演奏していた。

盆踊りの時に建てられるような、簡単かつチープな代物だ。彼らがVIP扱いされていないのは一目瞭然だつた。

でも。

上手い。

激しくも、全くブレないビート隊にセンターにいるギター・ボーカルの男の子もいい声している。

茶色のサラサラした髪にスラつとした長身。

端正な顔立ちだ。

ハスキーナ高音で英語の発音もバツチリだつた。

でもあたしはその男の子の後に微動だにせずギターを弾く少年に、目を奪われていた。

男性にしては小柄な感じだ。

170cmあるかないか。

細いけど、しつかりした体つきで真っ赤な肩から掛けたエレキギターを軽々操っている。

しかもすごいピッキングだ。

ただ早いんじやなくて、歌つてているような抑揚のあるメロティライ

ン。

顔は・・・。

きれいだ。

こんな綺麗な男の子みたことない。

時々目にかかる長めの前髪を邪魔そうにかきあげる。切れ長の鋭い目に通った鼻筋の美人顔だ。

ノリにノッてるオーディエンスを気にする風もなく、彼は一心不乱にギターを引く。

あたしは一番前列まで群集を搔き分けて辿り着いた。櫛の前まで行って、ギターの男の子がいる目の前で立ち尽くす。

自分の目の前で仁王立ちになつてゐるあたしに気が付いて、彼は首を傾げた。

名前を思い出せない友人だと思つてゐるみたい。

やがて激しい曲が終わつて、ギターボー・カルの茶髪が自己紹介を始めた。

「今夜はお招き頂きまして、ありがとうございます。オレ達は地元の大学、って言つたらどこだか分かると思うけど、そこの学生です。町内会の会長さんの息子がこのドラムのヤツで、今日はなんか余興するように頼まれてきました。」

聞いていた群集は人情溢れる経緯にどつと笑つた。

その間、あたしは櫛の上のギター少年を真つ直ぐ見詰めていた。彼もあたしをまっすぐ見詰め返す。

時が止まつたみたいな瞬間だつた。

「じゃあ、次の曲行きます！おい！ユウ！何してる？」

あたしと向き合って硬直している男の子にボーカルの人気が焦つて呼びかける。

その声にはつと我に帰つて、彼はギターを持ち直した。

いきなり始まる彼の高速ギター。

あたしは大音響の中、初めて鼓動の高まりを感じていた。

梅雨はキレイだ。

洗濯物がたまってしまう。

この狭いアパートで、干す所もないのに。  
明日、何を着ていけばいいのか・・・？

時計は11時を回っている。

ぼくはこんなくだらないことを悩みながら、たまつた洗濯物をどこに干そうか試行錯誤していた。

大学生になつてから、ぼくは親元を離れてこのアパートに住み始めた。

大学から自転車で15分くらいの学生専用アパートだ。

自由を満喫できる一方で、掃除、洗濯、勉強の合間に何でも自分でやらなければならぬ。

が、草食系で女子力が強い僕には大した仕事ではなかつた。  
実家にいた時から、家事全般は僕は寧ろ好き好んでやつていた。  
一人だつたら、全く問題はなかつた。

そう、あの女子力〇の同居人さえいなければ・・・。

その時、玄関のドアがバーンと音を立てて乱暴に開かれた。  
ぼくは洗濯物を両手に持つたまま、その方向を見る。

乱暴に入ってきたのは、ぼくの片割れであり同居人の優ゆうだつた。

「あ、おかえり。優。」

「・・・良まだ、起きてたのか?」

優は手に持っていたギターのケースを床に下ろし、玄関に座り込んでブーツを脱いでいる。

やがて、腕を頭の後ろに組んで、伸びをしながら部屋に入ってきた。

ベルトで押さえてある破れたジーンズにダブダブの黒いTシャツ。汗で濡れた前髪長めの茶髪。

ファッションセンスは違うけど、その姿は僕そのものだ。

不思議なことはない。

僕たちは双子だったから。

「ライブ、どうだった?」

洗濯物を干しながら聞く僕を振り返りもせず、優は面倒くさそうに返事をする。

「それなりに人來たから、まあまあかな。あんなグラグラしたところでやつたの初めてだけど。」

ギターが上手い優はよくこういうイベントに誘われる。

高校から始めたギターが、今では大した腕前なのは僕が一番よく知っている。

それまでは全く音楽に縁がなかつた筈だ。

中学校までは一人で一緒に柔道部に入つてたんだから。

「すっぴえかわいい女の子がいた。」

突然、優はニヤつとして言った。

「ああ、そう。」

僕は刺激しないように、軽く受け答える。

別に大したことじゃない。

女の子にモテモテの優はライブの度に女の子ファンをゲットしていくんだから。同じ外見なのに、地味で内気な僕は彼女もいないし、モテたこともない。

突然、部屋の電気が消え、目の前が真っ暗になった。

僕は手に持っていた湿ったシャツを持ったまま、立ち尽くす。

「優？ 電気消した？」

その質問に答えず、優は部屋の入り口で電気のスイッチに手をかけ突っ立っていた。

暗くなつた部屋の中で、月明かりに照らされた優の首から上だけが白く浮き上がる。

「・・・体が熱いんだ・・・。良・・。」

溜息交じりに優の声がする。

僕はその声にゾクつとした。

優は、ダブダブのTシャツを優雅な仕草で脱ぎ捨てると、上半身裸でゆっくり僕の方に歩み寄つてくる。

月明かりで、真っ白な細い体が暗闇に浮き上がつた。

細いけどしっかりした骨格、うつすらと筋肉のついたしなやかな肢体。

大きめのジーンズをベルトで縛り付けるように、腰でひいている。

それがウエストの細さを強調していた。

ぼくの目の前まで来ると、優はそのしなやかな腕を伸ばし、僕の首

に巻きつける。

僕のほうが2㌢くらい大きいものの、ほぼ同じ大きさで同じ顔の優が自分の目の前にいるのは、不思議な感覚だ。鏡を見ているみたいな、って言つたらいいのか。他人が見たら不気味だらうけど。

ぼくと同じ顔で、優はニヤリと笑つて舌を出した。  
悪そうな顔・・・。

同じ骨格でも、こういう表情は僕にはできない。

「・・・やうせうよ、良・・・。」

僕がかけていた銀縁メガネを勝手に外すと、優は僕の頭を抱き寄せ、キスした。

いきなり舌を入れられ、僕は一瞬息が詰まる。  
愛とか、優しさとかは全く無縁の、貪るようなキスだ。

己の性欲を満たす事のみに、優の舌は僕の口内を侵略していく。

僕がキスを受け止めている間に、優の手は僕のジャージの上から、固くなってきた部分を掴んだ。

その変化を優は楽しんでいる。

「・・・したいだろ?」

もづ、バレてる。

僕は観念して、目を閉じた。

優は乱暴に僕のTシャツの襟首を掴んで、シングルベッドに押し倒した。

そのまま丁度、柔道の締め技の要領で、肘を使って仰向けに倒れた僕の首を押さえる。

呼吸がしにくくなつて、僕は咳き込んだ。

そんなことはお構いなしに、優のもう片方の腕は僕のジャージのズボンを引き摺り下ろしていく。

顕わになつた僕の下半身に、外の空気が触れて、心もとない。

首を絞め上げ、僕の自由を奪うと優はサディスティックな笑みを浮かべて再び、キス攻撃に出る。

歯がガチガチ当たるような乱暴なキス。

優の舌は僕の口内をこねくり回した後、今度は僕の舌を吸い上げる。頸動脈を押さえつけられた上、口が塞がれて、呼吸ができない。

僕が苦しがる顔を見て、優は更に欲情する。

女の子相手だつたら、絶対泣き出すS的性行為。

何で僕はされるがままになつてゐるのかと、時々考える。

好きなんだよな。

優のことが。

反応してきた下半身の上に優は馬乗りになつた。

自分のジーンズを素早く脱ぎ捨てると、僕のモノをそれこそ物みたいに握つて自分の中に収める。

「う・・・あ！」

思わず、呻く僕を優は上から見下ろし、囁きながら笑った。

「お前だけだよ、良。俺の相手してくれるのは。」

それは、そうだろう。

こんなやり方で、誰がお前なんかと付き合つもんか。

優は僕の意向なんか、全く気にすることなく自分の感じるポジションで腰を動かし始めた。

僕は少しでも、優の体温を感じようと、その白い胸に手を伸ばした。その手を素早く払いのけて、優は更に力を込めて僕の頸動脈を締め上げる。

「・・・く、くるし・・・。」

「人の体、勝手に触るんじゃないよ。」

優はすごい目で睨みつける。

僕にはこんなことしといて、何て勝手なヤツだ。  
諦めて、僕は抵抗するのをやめた。

やがて、一人で満足した優は僕の上に被さつた。

荒い息をして、体を震わせている優の背中を僕はそつと触る。  
肉のついてない骨張った硬い背中だ。

正面から裸で見ない限り、優が女の子だつて見破る人はいないだろう。

優は肩で息をしながら、僕の上で伸びている優に、ぼくは言つにく  
い事をオズオズと口にした。

「・・・優。」

「・・・ん?」

「あの、僕はまだなんだけど・・・。」

「知らねえよ。一人で勝手にやつたら?」

冷たく言い放つと、優は僕から体を離して、ベッドから降りた。不完全燃焼のまま、僕は一人で仰向けのままベッドに置き去りにされる。

こういうのが嫌なんだ。

双子の兄の僕のことなんか、性欲のはけ口としか見ていない。

僕は少しイラつとして厭味を言った。

「冷たい女の子は嫌われるぞ。」

その刹那、さつき優が玄関に置いたギターケースが僕の腹の上に振り下ろされた。

木製の四角い箱のギターケースの角が、上手い具合に僕の鳩尾に突き刺さり、思わず呻き声を上げる。

鬼の形相で優は僕の腹の上のギターケースに片足を乗せて、グイグイ踏みつけた。

「てめえ、ケンカ売つてんのかよ?言いたい事はそれだけか、ああ?」

「ごめん、何でもない。」

謝るに限る。

こいつはキレたら理屈が通じる人間じゃないんだから。

優はさつさとTシャツを被り、ジーンズを履いてベルトを締め直す。

ギターを抱むと、振り向きた言つた。

「俺は女じゃない。男でもないけどな。不愉快だから、今日は帰る。

」

バーンー、と音がして玄関のドアが閉められた。

帰るつて、どこにだよ？

一緒にここに住んでるのに・・・。

僕は強姦され、暴行され、放置されたまま、ベッドに仰向けになつて呆然としていた。

あんなヤツでも僕の双子の妹なんだ。

普通の双子と少し違うのは、あいつが自分のことを男だと思つていること。

そして僕が高校生の時から、じついう関係を続けていたことだった。

僕の双子の妹は宮崎 優という。  
だから、双子の兄の僕は宮崎 良。

二人合わせて優良コンビにしたかった両親はこう命名した。  
二人合わさればいいのだが、単体で見ると良より優の方が優れてい  
る訳で、僕はこの名前が気に入らない。  
しかも、双子とは言え、先に生まれた僕の方が良になってしまった  
のは、優の響きが女子らしいからなどと言われても納得できるも  
のではなかった。

もともと、近所では「宮崎さんちのいじめっ子の方、いじめられっ  
子の方」で、通っていたけど。

この妹、生まれた時から自分を男だと思つていて。  
女の子らしい要素をまるで持ち合わせていないのだ。

身長は168cmだから女性としては高い方だ。  
胸もお尻も全然なくて、20歳になつた今も少年みたいな体型をし  
ている。

同じ顔の僕が言つのも変だけど、なかなかイケメンだ。  
シャープな顎のラインに切れ長の一重の目。  
通つた鼻筋に薄い唇。

ビジュアル系バンドのギタリストに相応しい風貌だ。

僕と決定的に違うのは声と性的特徴だけだろう。

軟弱でも一応男だった僕は声変わりした。

対して、優の声は女の子っぽくもなかつたけど、やつぱり男の声ではなかつた。

強いて言えば、アニメの少年主人公みたいなキレのある低めの声だ。

優を見てまさか女だとは思わない女の子達が、何度もここまで告白しに來た。

彼女達は、僕らが双子だつて知らないから、ダサ過ぎる僕が銀縁メガネでジャージで出ていくと、ガツカリして帰つていく。

失礼な話だ。

基本構造は同じなのに。

優は子供の頃から凶暴で、自分勝手なヤツだった。

いつも男の中に混じつて遊んでたし、ケンカも男の子と対等にやつていた。

いじめられつ子だつた僕なんかいつも置いてきぼりにされていた。

凶暴な優に礼儀を、軟弱な僕に勇気を与える為、両親は僕らを町の柔道教室に通わせる事にした。

高校まで僕らは一緒に柔道部に入つていたんだ。

その柔道を優が突然辞めたのには訳があつた。

中学校になると、女子の中では圧倒的強さだつた優も男子には負け るようになつた。

男女の力の差が出てくるんだから無理もない。

そんな時、僕が優の相手をしたことがあつた。

執拗に足技をかけてくる優を、僕は力任せに顔から投げ飛ばした。

完全に力技だつた。

柔道つて技が決まれば大して痛みはないのだが、力任せに倒す時は相手が痛い。

顔から畳に投げ飛ばされた優は、鼻血を出して一時退却した。

優が逆襲に来たのは、その晩のことだった。

家中が寝静まつた丑三つ時。

僕は首を絞められ、窒息しそうになつて目を覚ました。

暗闇の中、何が起こつているのか把握できなくて、僕はただ首に巻きつくるその手を必死で外そうともがいた。

その時、闇の中で低い声がした。

「・・・いつからだ？」

「な、何が？ 優？」

その声は確かに優だつた。

僕の問には答えず、優は更に首を締め付けてくる。

「いつから手加減してた？ 答えろよー。」

そう言われて、優が今日の柔道のことで反撃に来たんだとやつと分かつた。

「て、手加減なんてしてないよ。今日はまぐれだつて。」

「嘘つくな！ 本当はずつと手加減してたんだろ？ いつから手え抜いてやつてたんだよ？」

「手は抜いてないつて。でも、女の子だし、力でねじ伏せるのは反

則だった。「メン。」

「それが、手え抜いてるって言つてんだる！」

どうしてそこまで怒つてゐるのか、僕には理解しかねた。だけど、僕に力で負けたのが彼女のプライドを傷つけたことだけは分かつた。

「気に入らなかつたら謝るよ。だからこの手を放せつて。」

「気にいらねえよ！何でお前みたいのが男なんだよ。俺は頑張つたつて、お前に勝てないのに・・・！」

僕の顔にポタポタつと熱い液体が落ちてきた。

僕は驚いて、馬乗りになつてゐる優の顔を見上げる。優は泣いていた。

そして次の瞬間、彼女は信じられない行動に出た。

いきなり僕に抱きつくと、キスしたのだ。

キスを続けながら、僕のパジャマのズボンを引き摺り下ろし、股間に手を這わす。

「・・・・・！」

やめて！と言おうとしたけど、口が塞がれて声が出ない。やがて準備が整つた僕の下半身の上に、優はまたがつた。

しばらく僕たちはお互いの同じ顔を見ながら、繫がつていた。

不思議な感覚だった。

生まれる前の状態に帰つたような・・・。

やつと完全体になれたような安堵感さえ感じた。

僕らは激しくなる鼓動を感じながら、お互いの顔を見つめあつた。

「・・・お前がキライだよ、良。俺は男になりたかったのに・・・。お前なんかに負けたくないのに・・・。」

突然、搾り出すような泣き声で優は言った。

でも僕はその時、前から言いたくて言えなかつたことを言つてしまつたのだ。

「・・・僕はお前が好きだよ。ずっと前から。お前が女で良かつた。」

返事の代わりに、優はガバッと起き上がって体を離すとベッドから飛び降りた。

月明かりに照らされた顔が、涙に濡れた目で僕を睨んでるのが見える。

「良、俺は男じゃない。でも、女でもないんだ。女扱いすんな。」

そう言つた優の白い顔はすぐ女っぽかつた。  
僕は、今の優の行動の意味がやつと分かつた。  
確かに彼女は、今日の逆襲にきたんだ。

そして、それは女の武器を使って大成功を収めた。  
その日、僕は童貞を奪われ、優の奴隸になつたのだから。

その後、優と柔道をすることはなかつた。

彼女は突然、柔道部に退部届けを出し、ギターを始めた。

「音楽は男女の差がないからな。」

優はそう言って、初めて買つてもらつたエレキギターを嬉しそうに眺めていた。

16歳の時の話だ。

僕は、あの時から優の虜になつたまま、20歳になつていた。

開けっ放しの窓から差し込む朝日で僕は目を覚ました。

昨日の洗濯物の籠が、そのままの状態で窓際に転がっている。僕は頭を働かせようと、首をグルッと回してみる。

そうだ。

昨日、優と・・・。

そのまま、眠ってしまったみたいだ。  
で、あいつはどうこ行ったんだ？

ベッドから降りようとした僕の足に布団に包まれた大きな物体がひっかかった。

躊躇した僕はその物体の上に倒れ込む。

「・・・ってえなあ・・・。」

布団の中から、不機嫌な声がした。  
優だ。

僕は少しホッとして布団をめくつてみる。

布団の中には昨日と同じTシャツで、冬眠中のリストみたいに丸まっている優がいた。

「何だよ。結局ここで寝たのか？」

僕の質問に優は田も開けずにボソボソ返事をした。

「ちょっとだけ、出かけた。コンビニで酒買って・・・。そしたら、酒とギターで重くて歩けなくなつて、そんで帰ってきた・・・。」  
言われて見ると、流し台にビールの缶が5・6本転がつていて、なるほど。

その歩きにくいまじ重いギターを人の腹に叩き付けたのは覚えてないだろうけど。

僕は苦笑して、僕と同じ寝顔を見つめる。

「声かけてくれたら、付き合つて飲んでやつたのに。」「よく寝てたじやん。それにお前はキライだ。」

優はふてくされたように吐き捨てた。

そのキレイな相手とあんなことした後、寄り添つて寝てるんだから、優の思考回路は理解できない。

確かに男でもないけど、女でもないんだ。

TVでよくやつてる性同一性障害とも違う気がする。本当のこととは、優にしか分からんだけ。

僕はメガネをかけて、床に落ちたジャージのズボンに足を通した。外は初夏の日差しで、眩しいくらいだ。  
梅雨の合間の晴天。

今日は日曜だし、洗濯もできそつだつた。

「優、なんか食べる？朝ご飯作るけど。」

天気がいいだけで機嫌が良くなつて、僕は優に問いかける。

完全夜型人間の優は面倒くさそうに、片目を開けた。

「・・・ベーコンエッグ、作って・・・」

カフェオレとリクエストのベーコンエッグ、僕のお気に入りのベーカリーで買ったホテル仕様の食パン、輸入品店で買ったブルーベリージャム。

我ながら新婚さんの朝ご飯みたいなメニューを、キッチンの小さな折り畳みテーブルに並べた。

準備が全部整った頃を見計らって、優はクシャクシャになつた髪をかき上げながら、ノロノロやってきて椅子に座つた。

筋肉質の細い足が大きいTシャツからだらしなく伸びている。自分で言うのもヘンだけど、外見は僕そのものだ。女性ホルモンが働いた形跡は見当たらない。

まじまじと見ている僕に気付いて優がガソンつける。

「何見てんだよ?」

「・・・別に。似てるなつて思つてさ。」

「バーカ! お前と一緒にすんな。」

「そのバカの作った朝ご飯だ。嫌なら食つなよ。」

最後の僕の言葉に優はグッと言葉に詰まる。

「・・・嫌じやないよ。お前の料理、うまいから・・・」

「

僕らは小さなテーブルに僕らは向かい合つて食べ始めた。最近、こんな些細な口論が多くなつていた。

僕が優を求めるほど、優は僕をキライになつていいく。

自分の欲しかった男性の体を活用しないまま、グズグズしている僕に苛立ちを感じているのは分かつていた。

「今日、タジ飯は？」「ここで食べる？」

沈黙に耐えられず、僕が口火を切った。

優は人の目も見ないまま、サラッと返事をした。

「いい。昨日と同じトコで今夜もう一回やることになってるんだ。多分、メンバーと打ち上げするから。」

会話はそこで途切れた。

僕は黙つてコーヒーに口をつける。

再び、沈黙が続いた。

優は静かになつた僕の反応を見て、少し動搖を見せた。

ホラ、見ろ。

典型的猫型人間め。

追えば逃げるけど、逃げれば追つて来る。

生まれる前からの付き合いだから、僕も勝手が分かつていた。

「良、何か言えよ。」

氣まずそうにボソッと言つた優を、僕は少し優越感を持つて眺めた。

「何をだよ？」

「・・・何でもいいよ。」

「無理矢理やられたこととか、ギタークースで腹を足蹴にされたこととか、暴行された後、放置されたこととか、メシ作つたのにバカつて言われたこととか、か？」

「・・・ごめん。」

やつた！

謝らせた。

少し反省の色を見せた優が、なんだかかわいくて僕は笑った。  
そして、突然思い立つたって、僕は優に言った。

「ねえ、優。今夜の夜店ライブ、僕も見に行っていいかな?」

突然の提案に、優はギョッとして顔を上げた。

「別にいいけど・・・マジ? ロックだよ?」

「僕がロック聴いたらヘンか?」

逆に質問してやると、優は言い難そうに口籠る。

「ヘンじゃねえけど・・・、浮くよ? 僕の兄貴だつて分かつたら恥  
ずかしいじやん。」

随分、失礼なヤツだ。  
同じ顔してゐるクセして。

「いいよ。兄貴だつて分からぬように、いつもより更にダサイ格  
好で行けばいいんだろ? 大丈夫。お前が女に見えないくらい、僕は  
兄には見えないよ。裸で並ばない限りね。」

梅雨の合間の初夏の夜。

運命の歯車が動き出したことは、まだ気付いていなかつた。



「夜店が出始めるのは6時くらいから。ライブは商店街出たとこの公園で7時から。どこで見ててもいいけど、俺の兄貴だって分かんないよ」として来いよ。」

僕が一日洗濯に追われて、乾いたものを取り込み始めた夕方、優はそういう残し出て行つた。

バタンと締められた玄関のドアを見つめて、僕は溜息をつく。

僕が兄貴じゃ、そんなに恥ずかしいのか。

同じ顔してんのに、失礼なヤツめ。

ブツブツ毒づきながらも、彼女の言わんとすることは理解できた。

僕は、ダサいんだ。

そんなことは言われなくとも分かっている。

ビジュアル系、ギタリストの路線でいつてる優には僕のダサイ私服が許せないに違いない。

いいや。

敢えてそれで行つてやる。

僕は髪を七三分けしてワックスで固めた。

昔使つてた、黒ブチの大きなメガネを銀縁の代わりにかけてみる。

白地に青いボーダーのポロシャツにジーンズ。

もちろん、シャツはズボンの中に入れてベルトをした。

鏡を見て僕は満足した。

昭和の香りがする非モテ男子だ。  
カリスマギタリストの双子の兄には見えまい。

夕闇が広がり始めて、少し夜風が出てきた頃、僕は商店街に向ってアパートを出た。

この街に来て2年目になる。

二人で同じ国立大学にすれば下宿をさせてくれるという両親の提案を僕らは受け入れた。

同じ学生アパートに住めば、かなり出費が浮くからだ。

得意教科も同じだった僕らは一緒に進学する為に必死で受験勉強をしたものだ。

優が言つてた商店街の夜店はすぐに分かつた。

薄暗くなつた街の中に、露店が並んだその通りだけはボンヤリと薄明るかつた。

僕はイチゴのかき氷を買って、ストローで吸いながら商店街を歩き回つた。

よく見ると、ハデな衣装を着た学生風の若者が多い。

もしかして、みんな夜店ライブが始まるのを待つてんのか？

音楽なんて全然聴かない僕は、当然ライブなんて行つた事も無く、場違いな所に来た気がして少し氣後れした。

商店街を抜けると既に人だかりができる小さな公園が見えた。  
さつきまで僕の周りでウロウロしていた若者達もいつの間にかこつ

ちに移動している。

やっぱり、これ皆、夜店ライブに来た人達なんだ。

こんなに沢山の人の前でよくギターなんか弾けるものだ。

学芸会も大嫌いだった僕は、それを思い出し鳥肌が立つた。

茶色の縦ロールの髪がゴージャスな黒いレースのミニスカートに網タイツの女の子集団が僕の後ろをキンキンした声で話しながら、歩いていく。

その声は何の気なしに前を歩く僕の耳に入ってきた。

「でね、ライブの後、ユウをつけてアパートまで行ったのよ。」「えー！ユウのアパートってどこ？」

「それが、大学の近くの普通の貧乏学生アパートだったの。で、ノックしたらユウが私服で出てきたのよ。」「キヤー！マジ？ それで？」

「でもユウったら私服がメチャダサで、あたしがっかりして帰っちゃったの。だって銀メガネにジャージだよ。ガンダムが胸にプリントしてあるトレーナーなんだって。」「やだー！ガンダム？ ユウってそういう人？」

聞いていて、胸が痛くなつて僕はその場を離れた。  
間違いない。  
それは僕だ。

でも、ガンダムじゃなくてエヴァンゲリオンだよ・・・。  
もちろん、それを口に出す元気もなかつたので、僕は速やかに立ち去つた。

その時。

キー・・・ンという物凄いハウリングが響いた。

僕はびっくりして、耳を押さえてキヨロキヨロする。

対照的に、周りにいた人達は歓声を上げて、公園の中に駆け込んでいく。

どうやら、これが始まりの合図らしい。

・・うるさいじゃないか。

先行き不安になりながら、僕は群衆の中に入つて行った。

一人だけだと、何とか前に進めるものだ。

やがて、盆踊りの時にスピーカー や太鼓なんかを載せるような櫓が見えた。

その上に、ギターを持ったボーカル、ベース、ドラム、そして、いつもの真っ赤なギターを抱えた優が立っている。

優は割りと後ろのポジションにいた。

あいつはジャンプしたり、歯で弾いたり、ダイブしたりしないのかな？

ステレオタイプのロックギタリストのイメージしかない僕は、そんなことを真面目に考えた。

「階さん！ 今夜もお招き頂きました！ ありがとうございます！ 地元大学の学生バンドです。」

スラリとした長身の茶髪のボーカルがマイクを持つて挨拶した。

周りにいた女の子達がキヤー キヤー歓声を上げる。

なんか分かる。

この人はきっとモテ男だ。

「まずは景気付けに激しめヤツ、いきます。オリジナルです。曲は

TABOO！」

歓声とともに、すゝい騒音が響いた。

激しいドラムと腹にズンズン響くベース。

そして。

真っ赤なギターを自在に操る優が奏でる、闇夜を引き裂くようなメロディライン。

ギターが泣くつてこいつことか。

僕は興味を持ちながらも騒音に耐えられず耳を塞いだ。

ステージでギターを弾く優を僕は羨望の眼差しで見つめた。  
確かに、大したもんだ。

これなら男に全く引けを取らない。

もつと言えば、ステージの優は女には絶対見えない。

きつとすゞく頑張ったんだろうな。  
男に負けないよつこ。

ぼくはもう少し前に出ようと、飛び跳ねている群衆の隙間を縫うよう前に前進していく。

そこで僕は、気が付いた。

最前例の更に一步前に出たところに女の子が立っている。  
優がギターを弾いているその真ん前だ。

他の人間が激しいリズムに合わせてジャンプしているのに、彼女だけは人形のように固まつたまま優を凝視している。

僕にはすぐ分かった。

この子が優が言ってた「すうげえかわいい子」なんだって。

飛び跳ねる人の群れの間を通り、その少女が立っている2列ほど後ろにきた。

突つ立つていると逆に目だつてしまつので、取り合えず周りに合わせてジャンプしてみる。  
リズム感のない僕は皆より1テンポ遅れて着地するので、邪魔にされる事この上ない。

少女はジャンプしている周りの群衆には目もくれず、優だけを真剣な眼差しで見つめていた。

僕の所からは、横顔しか見えなかつたけど、確かにかわいい。小柄な女の子だ。

柔らかそうなピンク色の肌がワンピースの襟元から見える。さらさらの黒髪を大きな髪飾りで頭の後ろにまとめている。丸い顔の輪郭に、大きなぱっちりした黒い瞳。小さな鼻にぽつりしたピンクの唇。

まだ、思春期の高校生みたいだ。

優ってこういう子がタイプなんだ・・・。

でもアイツが好きになるのは、やっぱり女の子なのか？

僕は複雑な思いでその幼い横顔を観察していた。

僕は優が好きだった。

あんなヤツだけど、女の子として好きなんだ。

でも、あいつが男として女の子が好きなら、僕の思いはどうにいけばいいんだろう？

やがて、櫓の上でギターを弾いてる優が彼女に気付いた。

ピッキングを全く乱すことなく、櫓の縁まで出てくる。

周りの女の子達が歓声を上げた。

近くで見る優は、本当にかっこいい。

ギターを見つめる鋭い切れ長の目。

クールなのに熱い表情。

長めの前髪をかきあげると、女の子達が悲鳴を上げる。

やつぱり、僕とは違う人種だ。

外見が同じでも、僕らには決定的に違う何かがある。

人はそれをカリスマって言うんだろう。

僕は、ステージで輝いている優が羨ましかった。

やがて、激しめの一曲目、TABOOが終わった。

「ありがとうございますーでは、ここでメンバーソ紹介をします。まず、ドラムのショータ。こいつのお父さんがこの商店街の自治会長さんで、このイベントのスポンサーです・・・」

茶髪のギターボーカルが紹介を始めたその間に、優は櫓からギターを抱えたままピョンと飛び降りた。

一瞬、僕の周りの女の子集団がざわめく。

優は素早く少女の前に駆け寄ると、その手に何かを握らせた。

少女は驚いた顔で、優を見つめる。

終始無言で、優は再び櫓によじ登ると、何事もなかつたかのように同じ位置に戻つてギターを構えた。

少女は手を握り締めると、群衆を掻き分けて後ろに下がった。そしてそのまま、姿を消した。

僕と、近くにいた一部の女の子達は啞然として、それを見つめていた。

1時間ほどでライブは終わった。

一応メンバーの関係者である僕は、バンドメンバーの控え室ならぬ、公園のトイレ前に呼ばれた。

トイレの手洗い場では、町内会自治会長の息子のドラムの人が、上半身裸でバシャバシャと豪快に頭を洗っている。

さつきの輝いていたステージから一転、男臭いすごい光景だ。

プランコに座つてタバコをふかしていたさつきの茶髪のモテ男が、近づいてきた僕に気が付いて手を振つた。

「どーも。コウのお兄さんなんだってね。初めまして。」

人懐っこい笑顔だ。

僕も思わず会釈を返す。

近くで見ると、本当にかっこいい。

「おーー良ー帰るだー！」

アニメの少年主人公みたいな、よく響く声が僕を呼んだ。

トイレの裏から、いつものダブダブTシャツを着た優がギターを担いで歩いてくる。

「何だよ、コウ。打ち上げいかないのか？お兄ちゃんも来ていいの

だ。

茶髪は気を利かせて言つてくれたが、優は黙つて首を振つた。

「すんません、圭介さん。ちよつと、ヤボ用ができたんで。またラ  
イブで。」

「あつせ。それは残念。ま、また連絡するよ。じゃあな、お兄ちゃん。」

茶髪はタバコを咥えて、僕にワインクしてみせた。

「早くアパート帰るぞ、良！」

僕に、ギターケースの片側を持たせ、もう片側を優が後ろ向きに持つて、ぼくらはまるで「オサルの籠や」みたいな格好でえつたえつと歩いていた。

「打ち上げ行くから晩御飯いらんじゃなかつたのか？」

僕は優の背中に向つて怒鳴る。

「それどいじやねえよー早くアパートに帰なないとまずいんだよ。」

首だけ僕を振り返つて、優は怒鳴り返した。

「何だよ、それ？アパートに何があるのか？」

優は振り向いて、ニヤリと笑つた。

あ、いつもの悪そつな顔だ。

「かかってくらんだけ、電話が。  
少し弾んだ声で、優は言った。

「誰から？」

「決まつてんだろ？ 女だよ。」

女・・・？

僕は、まつと思いつ当たりで眉間に皺を寄せた。

「まさか、やつきの女の子か？」

「そうだよ、ギターのピックに一〇時にTENとひらがなで書いて渡してたんだ。だから、それまでにアパート帰らないと。」

僕はやつと理解した。

そういうことか。

「電話をさせてもらひすんだよ。あの女の子と付き合ひののか？」

「まだ、わからんねえよ。それより電話かかってきたら、良、お前が出ろよ。」

・・・句で、僕が？

言つてゐる事が把握できずに、僕は首を傾げる。

「何で、僕がいるんだよ。お前が誘つた女の子だろ？」  
「だから、さ。俺が女だつてバレたらまずいだろ？ 外見では分かん  
なくとも、電話だつたら声でバレるからな。お前なら、男の声出る  
じやん。」

おかしい。

その考え方、何かおかしいぞ。

「女だつて隠して付き合つて」とへ。

「だから、まだわからんねえって。グダグダ言つてねえで、さつわと歩け！」

僕は釈然としないまま、優の背中を見ながら歩き続けた。

アパートに戻つて、僕はまず、熱の籠つた部屋の窓を開けた。が、外気も湿気が多くて蒸し暑く、開けたところで大差はなかつた。

アパートの中では、シャワーを浴びようとニットバスのドアノブを掴んだところだと、僕は汗と埃でベタベタになつていた。

シャワーを浴びようとニットバスのドアノブを掴んだところだと、先客がさつぱりした顔で出てきた。

何も纏つていらない優の全身と鉢合わせした僕は、目のやり場に困つて慌てて下を向く。

本当に女なんだ、優は。

全然膨らみのない胸や、筋張つた筋肉質の手足はともかく、僕とは全く違う形状の下半身はござまかしようがない。だつて、ないんだから。

僕の赤面した顔に気が付いた優は、またあの悪そうな顔でニヤつと笑つた。

「何だよ、見たいのか？」

「み、見たくないよ！てか、パンツくらい履いて出て来いよ。」

「今更、隠したつてしまふがねえだろ。俺が女だつて知つてるくせに。」

ハハハと男らしく笑つて優はバスタオルを被つた。

そうだ。

僕はお前が女だつて知つてゐる。

だからこそパンツを履いて欲しいのに、その考え方は間違つてゐる。

悶々としながらシャワーを浴びて、僕はちゃんとパンツを履いてから外に出た。

優は既に短パンとTシャツを着て、床に座り込んで缶ビールを飲んでいる。

僕は、優の前に座つて、開けてない缶ビールを一本手に取つた。汗で水分を奪われた喉に、冷たいビールが流れ込んでいく。

生きてて良かつた瞬間だ。

「良、もうすぐ10時だ。電話かかつてきたら、お前が優だつて言つて話しろよ。」

優はビールをゴクゴク飲んで、手の甲で口の周りをグイと拭う。こんな仕草が自然に男らしい。

こいつが本当は男なのか、女なのか僕には分からなかつた。

「僕が出てどうするんだよ？」

「取り合えず、デートの約束してくれ。」

「デートしたら、そこで女だつてバレるだろ？」

「バレねえよ。性交渉するまではな。」

少し酔いの回つた顔で優は笑つた。

こんな表情は女っぽい。

こいつの体の中で二つの人格が出たり引っ込んだりしてゐる感じだ。

僕は質問を続ける。

今まで、何となく突っ込んで聞けなかつた優の性について、今なら答えてくれる気がした。

「優は女の子が好きなのか?」

「多分ね。好きになるのは大抵かわいい女の子だよ。」

ビールの缶をコラコラ振りながら、意外にもあっさり答えてくれた。  
今日は機嫌がいいらしい。  
僕は更に突っ込んでみる。

「・・・お前、女の子としたことあるの?」

「ないよ。キスまで。女だつてバレたところで、いつも逃げられる  
からな。」

「じゃ、男とはしたことあるの?」

「お前以外の男はないよ。俺はゲイじゃないし。」

あれ?

「・・・今、ヘンな事言わなかつたか?」

「どうこう意味だよ?」

優はニヤニヤして缶の縁を舌で舐める。

「男に興味がないんだ、俺。ヤルなら絶対女の子どがいい。でも、  
良は特別なんだ。女役に徹してくれるからな。お前とするのは好き  
なんだよ、これでも。」

「何だよ、それ?」

褒められてるのか貶されてるのか、僕は判断に苦しんだ。

「でも、女のやうびつをひつてヤルんだよ？・・・その、物理的に難しいだろ？」

僕の質問に優は真剣な顔になつて考え込む。

「それをいつも悩んでるんだ。テクだけじゃ女つて満足しないのかな？」

真面目にそんなこと僕に聞かれても、優以外に経験の無い僕が分かる訳ない。

「お前はどうなんだよ？体は女なんだろ？」  
「俺？・・・満足しないな。俺は無理。」「じゃあ、どうするんだよ？」  
「・・・通販で玩具を買つとか・・・？」

酔いに任せて、僕らは禁断の領域について真剣に議論し続けた。

その時。

ルルル・・・と壁に掛かっている電話から着信音がした。  
僕らは電話を見つめて、硬直する。  
時計を見ると、ジャスト10時だ。  
彼女に間違いない。

はじめた様に立ち上ると、優は足で僕の膝を蹴つた。

「おー！早く出うよー！富崎 優ですって言えよ。みやび

酔いが回つてゐる上に、胡坐をかけてたせいで体が動かない。

優に蹴られながら、僕はよろめき何とか立ち上がった。受話器を取つて、耳に当てる。

やや沈黙があつた後、小さなかわいい声がした。

「・・・あの。ゴウさんですか？」

「うわあ・・・。

これが本物の女の子の声だ。

僕のテンションは自然に上がった。

「はい、そうです。僕が宮崎 優ですよ。こんばんわ。」

そこまで言つたところで、僕のお尻に優の蹴りが入つた。

「痛つたいな、何すんだよ。」

お尻を押されて振り向くと、口をパクパクさせて、優が顔を真つ赤にして怒つている。

僕が理解できないでいると、優はノートに殴り書きして僕に見せた。

「バカヤロー、俺っぽくクールにしゃべれよー！」

「そんな、無茶な。

僕が平成のダサ男だつて知つてるくせに。黙つてたら、彼女の方から話しかけてきた。

「あの・・・ピック貰つてすぐ嬉しかつたです・・・。あたし、里中美咲つていいます。地元大学の2回生です。」

「え、高校生じゃないんだ。」

僕は少しづびっくりした。

しかも同じ大学の同級生だ。

「そりなんだ。僕もね、2回生だよ。文学部英文科。君は？」

テンションが高くなつた僕のお尻に再び蹴りが入る。  
優がノートに書かれた新たなる殴り書きを指差して、口をパクパクさせていく。

「ぐだらねえ」と言つてんじゃねえよ 今度どつかいかねえつてきけ！

僕は優にあつかんべーをして再び、受話器を握り締める。

今は僕に主導権がある。

悔しかつたら男の声で喋つてみる。

「あの～、良かつたら僕とデートしませんか？動物園とか、映画とか。例えば、明日の日曜日とかどうですか？」

電話の向こうで息を飲む気配がした。

「・・・はい。行きます。明日ですね。嬉しい・・・場所は・・・？」

交渉成立。

僕は優に向つて親指をぐつと立てて見せた。



「成功だ。明日朝、11時に駅前のマクドナルドに集合。映画でも見て来いよ。里中美咲ちゃんって言つんだって。」

僕は得意げにメモ書きを優に手渡した。

優はまだ酔いの冷めない赤い顔で、紙を受け取る。

冴えない顔だ。

「何だよ、嬉しくないのか？向こうもすげへ喜んでるよ。」

「・・・嬉しいけど・・・怖い。」

神妙な顔で優はボソッと言つた。

さつきまで、大衆の目前で派手なギターを弾いてた優とは別人みたいな、弱気な表情。

もつと言えば、女っぽい顔をしている。

「怖いって何で？性交渉するまではバレないんだろ？」

「・・・見極めが難しいんだよ。俺、これでも何度もフリれてんだから。」

髪をかきあげて、優は自嘲的な笑みを見せた。

「最初は、どの子もノリノリで来るんだ。俺もキスまではするよ。でも、その後は絶対バレちゃうだろ？俺だけ脱がない訳にもいかないし。だから、そこでカミングアウトするんだ。実は女だけどいいかな？って。」

僕は優の話を黙つて聞いていた。

イケメンなら苦労は無いという訳ではないらしい。

「で、そこでフЛАれるのか？」

「フЛАると言つより、逃げられるね。あたし、そういう趣味ありませんつて。傷つくよ、結構。」

優は次のビールを掴むと、グイっと開けた。

赤くなつた顔が少し子供の頃の面影があつて、僕はせつなくなつた。このややこしい性格のせいで、人に言えない悩みとか、辛いこととか、一杯抱えてきたんだろうな。

できることなら、僕の体と交換してやりたい。

軟弱な僕としても、その方が楽な人生を送れた筈だ。

僕らは生まれる時、入る体を間違えてしまつたに違いない。

優はビールを飲みながら話し続ける。

アルコールのせいでいつもより饒舌になつていた。

「あの子は、そういう女どもと、ちょっと違つ氣がしたんだ。直感だけど。もしかしたら、俺の体じゃなくて精神的な部分を見て好きになつてくれるかもつて。俺はいつかそういう女の子が、現れるんじゃないかと期待してるんだ。」

「・・・それって、レズビアンとか、そういう類の女の子になつちやうのかな・・・？」

僕は再び考える。

もう、経験値の低い僕には未知の領域だ。

僕のその言葉に、優は真面目な顔で僕を見上げた。

「良、いつも言つてるけど、俺は男じゃないし、女でもない。俺は俺だよ。子供の頃から親とか先生とかに何度も精神科に連れて行かれそうになつたけど、俺は病気じゃない。性ナント力障害でもない。多重人格でもない。俺はこういう人間なんだ。それだけじゃ、ダメか？」

「・・・いや、ダメじゃないよ。」

「俺を好きになつてくれる女の子は、結果的にそう呼ばれる人かもしれない。でも、何でもいいんだ。俺のこと見てくれるなら。」

僕は、珍しく心の内を語る優をただ見つめていた。

初めて見た優の一面。

凶暴で、自分勝手な僕の妹にこんなデリケートな一面があつたなんて。生まれる前から一緒にいたなんて、僕は一体何見てたんだろう。マイノリティな人間の孤独を分かち合える女の子を、優はずつと求めていたんだ。

でも。

「それは僕じゃ、ダメなの？」

思わず口に出た僕の言葉に、優は顔を上げる。

「いつも言つてるだろ？僕はお前が好きだつて。お前の本質を好きになる相手は僕じゃダメか？」  
アルコールのせいかもしれない。  
僕は少し感情的な口調で言った。

「良は双子の兄さんだろ？それはまずいよ。」

「まずいって、じゃあ、お前がいつもやつてる強姦プレーは何だよ。同性愛ならまずくないのか？」

「・・・そうだな。ビリもノーマルじゃないね。」

優はハハハと笑った。

僕のことなんか、まるで人事だ。

その笑顔に、僕はムキになつてのがバカバカしくなる。

「・・・もついによ。でも、覚えとけよ。僕はお前が好きなんだから。悩みがあつたら何でも言つて。」

「ああ、ありがとうございます。そうするよ、お兄ちゃん。」

優は笑つて、乾杯するようにビールの缶を僕に掲げてみせる。僕も何だか気が抜けて、缶を優の持つてゐる缶にコシンと合わせた。

「で、相談なんだけど、お兄ちゃん。」

優は再び、悪そうな顔でニヤッと笑つた。

嫌な予感がして、僕はビールを飲む手を止める。

「何？」

「明日のデート、お前が行つてくれないかな？どんな子か、お前が最初に見て、打診して欲しいんだ。もしかして逃げちゃうタイプの女だったら、俺、また傷つくるの辛いんだよ。」

酔いの回つた顔で、優は目を潤ませて上目使いに僕を見る。こういう時は女なんだ。

こいつは武器を使い分けることを、子供の頃から知つている。

さつきの話を聞いたあとで、僕が断わることはできなかつた。

「分かったよ。僕が行くよ。でも、最初だけだからな。」

日曜日、朝11時。

いいお天気だつた。

交通量も人も増えてきて、駅前は活気に溢れている。

昨日の夜、電話でユウさんに言われた通り、あたしは駅前のマクドナルドの前に立っていた。

今から、胸がドキドキしてゐる。

本人に会つたら、倒れちゃうんじやないかしら。

赤面症のあたしは、すでに真っ赤に火照つた顔を手でパタパタ仰いだ。

昨日のライブでユウさんに手渡されたピックを、あたしはまた握り締める。

PM10:00  
TEL XXX-XXXX  
ユウ

真っ白な涙型のピックには、それだけがマジックで書かれていた。  
嬉しかつた。

初日のライブでは全然動かなかつたユウさんは、昨日はあたしの目の前まで来て、パフォーマンスしてくれた。

そして、突然あたしの元に降り立つて、これを渡してくれたんだ。  
シンデレラにでもなつた気分だつた。

千春に連れて行かれた夜店ライブで、あたしはコウさんを初めて見  
た。

内氣で消極的なあたしが、追つかけまがいのことをするのは初めて  
だつた。

自分でも驚きだつたが、あたしはその時から恋をしてしまつたのだ。  
次の日も夜店ライブをやるという予定を町内会のチラシで見て、再  
び、あたしはあの公園を訪れた。

それが、昨日の夜の事だつた。

でも、だからと言つて、話しかける勇氣も行動を起こす度胸もなか  
つた。

ただあたしは、彼のギターを見つめる鋭い瞳を見ることができるば、  
それで良かつたのに。

それが、まさかデートして貰えるなんて・・・！

どうしよう、あたし。

人馴れしてないあたしは、口下手で決して一緒にいて楽しい人間で  
はないだろう。

つまらないヤツだつて思われたらどうしよう。

昨日の電話で話した時、コウさんは見かけによらず、意外に朗  
らかな感じがした。

もっと怖い人かと思ったのに。  
男性にしては高めの声だつた。  
でも、よく通るいい声だ。

彼の声を今日は間近で聞ける幸せを思い、再び、鼓動が激しくなる。

あたしはもう一度、マクドナルドの大きなガラスの自動ドアに自分の姿を写してチェックする。

レトロな青い縦ストライプのワンピース。

白いサンダル。

今日は髪を下ろしてカチューシャをしてみた。ちょっと乙女チック過ぎるかしら。

あたしの姿が映ったガラスにもう一人男の子の姿が映った。その男の子の手がバイバイするように横に振られて、あたしは慌てて振り返る。

大きめの黒いTシャツに、腰より低い位置で履いた大きめジーンズにスニーカー。

キャップを後ろ向きに被つて、ポケットに両手を突っ込んだその姿は少年みたい。

彼は、少し照れたようにこり笑つて言つた。

「あの、里中美咲さんですよね？僕は宮崎優です。昨日は電話ありがとうございました。」「

あたしは顔を真っ赤にして、その場で硬直した。ユウさんだ。

昨日の電話と同じ優しい声・・・！

固まつてしまつたあたしを見て、ユウさんは笑つた。明るい、かわいい笑顔だ。

昨日のギターを弾いてた鋭い田のクールな彼と、田の前で「一二一」している彼は、別人みたいだった。

ユウさんは、あたしに近づき背中をポンポン叩いてくれた。

「大丈夫？ 緊張しなくていいよ。実は僕も緊張してるんだから。お互い、気楽に話しあうよ、ね？」

「は、はい・・・・！ ありがとうございます。」

「ああ、何で気さくな人だろう。

あたしのことをこんなに気遣ってくれるなんて。

感極まって、あたしは泣きそうだった。

「美咲ちゃん・・・って呼んでいいのかな？ お皿には少し早いけど、せっかくマクド前だし、ドーハーでもどうへ・少し話しあうよ。」

「あ、はい！ でも、あたしの話、きっと面白くないと感じます。あたし、内向的で口下手なんです・・・。」

それだけは先に言つておきたかった。

あたしは暗い女なんだ。

後からがつかりされるのだけは、悲しくて立ち直れそうもない気がした。

それを聞いて、ユウさんはびっくりしたように切れ長の涼しい田を大きく見開いた。

長い睫毛がちょっと色っぽい。

中性的な感じだけど、チビのあたしよりはずっと大きかった。

「そりなんだ！ 気が合いそうだね。僕も子供の頃は苛められっ子で、今も友達あんまりいないんだよ！」

ユウさんはすゞしく嬉しそうに顔を輝かせて、あたしの両手を握つて  
ブンブン振つた。

まるで、砂漠の中で仲間を見つけたみたいな感激ぶりだ。

「ますます美咲ちゃんと話したいな。で、マクド入り…」

ユウさんはあたしの背中をぐいぐい押して、店の中に入つていく。

人は見かけによらないものだ。

カリスマギタリストのユウさんが元苛められっ子で、友達いないな  
んで。

しかも、テンション高くて、朗らかなキャラだ。  
ちょっと天然な感じだし…。

あたしはライブの時とは違う一面を持つユウさんをますます好きになつていた。

入り口のカウンターでコウさんは一人分のコーヒーとポテトを頼んで、窓際の椅子が二つ並んだ小さなテーブルを陣取った。その小さなテーブルに、あたしは彼の目の前に向き合って座った。テーブルの幅、約50㌢。

こんな至近距離に、コウさんの笑顔がある。あたしは感激を通り越して、呆然としていた。

「美咲ちゃん? コーヒー冷めるよ。そんなに緊張しなくていいから。」

「コニコ笑みを絶やさず、コウさんはあたしを気遣つて話しかけてくれる。

気の利いた対応ができないあたしは、何だか申し訳なかつた。

「・・・じめんなさい。あたし、夢みたいで、すく嬉しくつて・・・。今日は本当にありがとうございます。」

「そんな、大袈裟だなあ。誘つたのは僕なんだから。いつもライブ来てくれるの?」

コウさんはニコニコしながら頬杖をついてあたしを見つめる。

長い睫毛の下の、黒い瞳。

そこに鈍臭いあたしは、どんな風に『』てるんだろ?。

「すいません。ライブ見たのは一昨日が初めてです。あたし、その時、最前列で見てたんです。コウさんもあたしのこと見てくれましたよね?」

「あ、え? 一昨日から来てるの?」

ユウさんは急に動搖して「一ヒーをむせ込んだ。  
そうだ。

あたしは、確かに一昨日のライブで、彼の視線を感じていた。  
それで、彼はギターの出だしを外してしまったんだから。

「そ、そうだね。あの時、いたよね。そりいえば。で、また来てく  
れたんだね。」

笑いを絶やせないよつて、彼は慌てて言った。

「はい！あたし、ユウさんのギター、本当に感動しました。ギター  
が泣き叫ぶような、すごい迫力でした。あたし、ピアノやつてるん  
です。是非、一度セツションしませんか？」

「ええつ？僕がギターでセツション？あー・・・考えとくね。」

あれ？

あたしの渾身のお願いが、案外あっさりスルーされた。  
ピアノとハードロックは合わないと思われちゃったかな・・・。  
ヘンな」と、言つちやつた。

「ああ、美咲ちゃん。大丈夫だよ。僕ならいつでも弾くから。でも、  
今日はギター持つてないからね。」

しょんぼりしたあたしの機嫌を直そつと、ユウさんは慌てて言った。

・・・優しい。

クールなギタリストは、本当は感情豊かな温かい人なんだ。  
あたしは彼の気遣う心が嬉しかった。

あたし達は「一ヒーを飲み終えた後、街をゆっくり歩き回った。  
初夏の日差しが強くなってきて、梅雨の気配は既に無い。

「もう夏だね。美咲ちゃんは海とか行くの？」

歩道側のあたしの横を並んで歩きながら、コウさんは聞いた。

「あ、全然です。あたしも、友達あんまりいないし、泳げないし。

「あー！僕も。一緒に行く友達がないんだよね。今度一緒に行く？」

「…今、何て？」

あたしは耳を疑つた。

コウさんがあたしを海に誘つてくれるの？

「それって…、次のデートの予約ですか？」

「え？まあ、そんなとこかな。」

コウさんは急に言葉に詰まつて、顔を赤くした。

どうしよう…。

あたしは嬉しくて泣きそうになつた。

「はい！あたし、水着買つて待つてます。お弁当も作ります。」

「はは…、大袈裟だなあ。でも、美咲ちゃんの水着姿みたいな…。  
…つと。」

コウさんは赤くなつて、慌てて口を押さえる。

ああ、こんな冗談まで言つんだ。

二人でパラソルの下、潮騒を聞きながら、砂浜でお昼寝。  
素敵すぎる。

あたしは、そのまま死んでもいいかも。

「あ、あたしも、コウさんの水着姿見たいです。楽しみにしてますね！」

あたしのその言葉に、コウさんは蒼白になつた。  
突然、立ち止まって手をバタバタ振り回す。

「ま、待つて…やつぱり、海はまずい…プールもまずい！山にしよう！」

「ええつーど、どうしてですか？」

たつた今浮かんだ、砂浜に一人で寝転ぶシーンがいきなり壊され、  
あたしは落胆を隠せず大きな声を出した。

コウさんはガシツとあたしの両肩を掴み、顔を近づけて言った。

「僕にはね、人に見せられない傷痕が胸にあるんだ。だから、海パノになることはできないんだよ。」

「ええつー！何ですか、それ？」

胸に傷痕・・・？

大きな手術でもしたんだろうか・・・？

あたしは本気で心配になつて青褪める。

「あたし、そんなの気にしません！まだ痛いんですか、それ？見せてください！」

「だ、だめだつて。あ、ちょっと美咲ちゃん、ここ歩道だつて！」

言われてハタと気付くと、あたしは彼の大きなTシャツを掴んで捲り上げるところだった。

道行く人の群れがあたし達の周りを避けるように流れしていく。

クスクス笑う声が聴こえた。

「「、「めんなさい！あたしつたら・・・！」

慌てて放した手で、あたしは顔を覆つた。  
恥ずかしくて、顔から火が出そう・・・。

あたしの肩に彼の手が触れた。

そして、その手はグッとあたしを彼の肩の下に引き寄せる。

あたしの耳元で彼の優しい声がした。

「美咲ちゃん、心配してくれてありがとう。」

もう、死んでもいい・・・！

あたしは彼の腕の下で既に瀕死の状態になっていた。

その後、あたし達は映画館に入つて、今話題になつてゐる映画を見た。地味な主人公が、へんなマスクをつけた途端、ハイな悪魔になつてやりたい放題するコメディーだった。

暗い映画館の中で、隣にコウさんが座つて一緒に映画を見る。それだけで、あたしは胸が一杯で映画の内容なんかよく覚えてなかつた。

彼は、面白いジョークが出ると声を上げて笑い、アクションシーンでは手に汗握つて、座席から体を乗り出した。

分かりやすい程、感情豊かな人だ。

あたしは子供のよくな彼がますます好きになつてしまつた。

どうしよう・・・。

あたし、ライブの時よりもっとコウさんのこと好きになつてゐる。あのクールなギタリストも、今、子供のよくな目を輝かせている彼もどっちも大好き！

このまま、ずっとこうしていしたい・・・！

そう思つた時、あたしは自分でも驚愕の行動に出た。座席からそつと手を出した。

膝の上に置かれていたコウさんの手の甲にそつと自分の手を重ねる。恥ずかしくつて、あたしは真っ赤になつた顔を俯かせた。

これつて、男の人か、もしくは痴漢がやることだわ・・・。  
お願ひ。  
どうか、拒否しないで・・・！

やがて、彼の反対側の手が、そつとあたしの手の甲を包んだ。  
少し湿つている大きな手だった。

暗闇の中の彼の横顔をあたしはそつと見つめる。

彼はあたしに優しく微笑んだ。

あたし達はそのままの姿勢で、固まっていた。

もちろん、映画の内容なんて、もうビリでも良くなっていた。

やがて、映画が終わって、エンディングが終わって、観客もバラバラと出口を指して席を立ち始めた。

オレンジ色の照明がついた映画館の中で、あたし達だけがまだ座席に座つたまま手を握り合っていた。

静かなBGMが流れる中で、あたしはコウさんの手の温かさを感じていた。

言うなら、今しかない。

次回があるかどうかの保障もないのだから。

唐突に思い立ち、あたしは覚悟を決めた。

「・・・好きです！あたし、コウさんのこと・・・今日でもつと好きになっちゃいました。」

あたしは目をギュッと瞑つて小さな声で言った。  
コウさんは硬直したまま、正面を見ている。

「僕のことが好き?」

「……はい。好きです。」

それを聞いて、彼は髪を搔きながら、ちょっと困った顔をした。

「美咲ちゃん、一つ質問していいかな?」

「は、はい。何ですか?」

急にぐるっと首の向きを変え、あたしと向き合いつと真剣な顔で言った。

「同性愛ってどういって?」

「……は?」

今、同性愛って言った?

一連の流れとかけ離れた質問が突然出て、あたしは拍子抜けた。

「あの、どう思つてどうこうですか?コウさんと同性愛者って意味ですか?」

「ち、違うよ。ただ、どう思つのか聞きたかったんだ。例えば、美咲ちゃんは、友達の女の子を愛せる?」

「な、何言つてるんですか?」

あたしは質問の真意が掴めず、混乱し始めた。

あたしが、例えば、千春を愛せるかってこと……?

それが、今あたしが告白した事と、何の関係があるの?

「深く考へないでよ。美咲けやんは女の子を愛せるかつて質問なんだ。」

しどりもどりにコウさんは説明する。

でも、あたしにひとつては深い意味のある質問だつた。

あたしは、コウさんの言わんとすることが分かつたんだ。

「何なんですか・・・それ？あたし、真剣に告白してるの・・・！」

座席を立つて、あたしはカバンを掴んだ。

突然、立ち上がったあたしを見上げて、コウさんは慌てる。

「お、落ち着いて、美咲ちゃん・・・。」

「もう、いいです！あたし、コウさんが言いたい事、分かりました。へんな話して、話を逸らそつとするなんて、ずるいです。あたしが好きになつたら困るつてことですね。今日、あたしはすぐ楽しかつたけど、コウさんはそうじやなかつたんですね・・・！」

溢れる涙を止める事はもうできなかつた。

あたしは、慌てて掴まえようとする彼の手を振り切り、出口に向つて走り出した。

ロビーには次の上映を待つお客さんで賑わっていた。

あたしはハンカチで顔を抑えて、ノロノロとお手洗いに向った。  
この泣き顔で外に出るのは絶対嫌だった。

それに、女子トイレまでコウさんは追っかけて来れないだろう。

初めてのデート、あたし、死んでもいいくらい楽しかったのに。  
初めての告白だったのに・・・。

真剣なあたしにあんな冗談言う必要がどこにあつたんだろう。  
断わる口実だつたんだわ・・・。

人気のない女子トイレにあたしは入った。

ホテルみたいなタイル張りの綺麗なトイレだ。  
手洗いの前にかかっている大きな鏡にあたしは自分の顔を近づける。  
マスクカラが取れて、酷い顔だ。

目の周りが真っ黒でパンダみたいになつていて。

その顔が情けなくて、あたしはまた、目頭が熱くなつた。

ハンカチでゴシゴシ擦つても、目の周りは黒く汚れていいくばかりだ  
つた。

その時、鏡に人の姿が映つた。

鼻をくつ付けんばかりに鏡に接近しているあたしを、その人は腕を  
組んで苦笑しながら見ていた。

あたしは、ギョつとして振り向く。

「コウさんー？」

そこには、さつき振り切つておいてきた箸のコウさんが笑つて立つ

ていた。

そんな筈ない。

あたしの方が先に出たのに、どうしてここにいるの？  
て、言うか、ここ女子トイレなんだけど？？

あまりの驚きに口をパクパクさせているあたしに、彼は近づいた。  
さつきと同じ顔なのに、どことなく表情が違う。  
ちょっと、ゾクつとするような迫力を感じた。

「ゴ、ゴウさん…どうして女子トイレにいるんですか？」

あたしは、取り合えず素朴な疑問を投げかける。

彼はあたしの質問には答えなかつた。

答えの代わりに、いきなりあたしを抱きしめると、一番近くの個室に引き込んだ。

一人で個室に入ると、ドアを閉め、素早く鍵をかける。

あたしは、何が何だか分からなくつて、彼に抱きしめられたまま田をパチパチさせていた。

「あ、あの？ ゴウさん…？ どうした…？」

あたしの質問はそこで遮られた。

彼は狭い個室の壁にあたしを押し付けると、いきなり顔を近づけ、唇を重ねた。

彼の右手があたしの首の後ろをしっかりと支え、左手はあたしの顎を支えて固定する。

自由を奪われたあたしは、ただ、彼のキスを受け止めた。

ギターの弦を押さえるせいだろうか。

左手の指先がザラつとした感触で、その指があたしの唇に触れた。

あたしの人生初めてのキスは、ただ、すごかつた。

さつきまでの二口一 口笑っていたコウさんは別人みたいだ。あたしの唇を押し開き、彼の舌は強引にあたしの舌を絡める。

唇を征服し終わると、コウさんはあたしを抱きしめ、首筋にキスを続ける。

時々、彼の歯が素肌に触れ、あたしは鳥肌が立つた。吸血鬼に血を吸われる少女になった気分。

体が痺れて動けない・・・。

それは強引で、甘くて、でも不思議と嫌じやなかつた。

やがて彼は体を離すと、あたしを真つ直ぐ見つめた。真面目な顔だ。

切れ長の目がキリッとしている。

昨日のライブの時の真剣な瞳だった。

あたしが、大好きになつたギタリストの鋭い視線だ。

彼はあたしの耳元に口をつけて、声にならない小さな声で囁いた。

「俺、あんたが好きだよ。」

それだけ言つと、彼はあたしを個室に残したまま、ドアを開けて外に出た。

トイレから走り去つていく足音が響く。

まだ、余韻に浸っているあたしは、呆然としたまま洋式トイレの蓋の上に座り込んだ。

何だったの、今の？

あたし、ゴウさんにキスされちゃった……？  
さつきまで彼の舌が這っていた首筋をあたしはそつと抑えた。  
まだ、濡れた感覚が残っている。

ヨロヨロとあたしは個室から出た。

手洗いにはもう誰もいなかつた。

ゴウさん、どこに行つたんだろう？

どうして、一人で逃げちゃつたんだろう？

あたしはヨロヨロしながら、トイレの外に出た。

「美咲ちゃん！」

名前を呼ばれて顔を上げると、さつき一人でトイレから出て行ったゴウさんが駆け寄つてくる。

息を切らしながら彼はあたしの肩を掴んだ。

「美咲ちゃん、ゴメン。僕、ヘンなこと言つちゃつて……。そんなつもりじゃなかつたんだ。」

「……ヘンなこと？ そんなつもりじゃなかつた……？」

あたしは愕然とした。

たつた今、好きだつて言つてくれたのはヘンなこと？  
わつきのキスはどつこつつもりだつたの……？

あたし、からかわれたんだ。

咄嗟に思ついたのは、そのことだつた。

「あ、あたし、初めてだったのに…」

急激に頭に血が昇ったあたしは、コウさんのきれいな顔を平手で思い切り引っ叩いた。

思った以上の威力に、コウさんは頬を押さえようめぐ。

「み、美咲ちゃん…？」

「もう、いいです！コウさんの気持ちよく分かりました。あたしのこと、好みじゃなかつたら、最初からやう言つてくれれば良かったのに…。コウさんは、ふざけてあんなことできる人なんですか…。？」

あたしは、頬を押されたまま立ち去る彼を残して、映画館の廊下を出口に向つて走った。

青ストライプのワンピースの後姿が遠ざかっていく・・・・。

俺は、それを呆然と見つめる俺そつくりのケツに蹴りを入れた。不意をつかれて、良は顔から廊下に倒れ込んだ。

受身を咄嗟に取つた所はさすがに、柔道有段者だ。

「痛つてえ・・・うわっ！――！」

ケツを手で押されて振り返つた良は、俺の顔を見て今度は背中からひっくり返る。

器用なヤツだ。

「ゆ、優？お前いたのか？いつから？？？」

「つるせえ、いつからだつていいだろ。それより、何で泣いて帰つたんだ、あの子。」

「僕も分かんないんだ。僕が言つた事が気に障つたみたいで・・・。

「・・・俺がしたことも気に障つたかな。」

「はあ？お前がしたことつて何だよ？彼女に顔見せたのか？」

良は田を丸くして立ち上がつた。

全く同じ服装で来た俺の前に、同じ背格好の良が向き合つて立つと鏡を見ているみたいで気持ちが悪い。

映画館を歩いていた客も、ぎょっとした顔で俺達を眺めていく。

俺は舌打ちして、良の腕を掴んだ。

「「！」じゃ、ナンだからさ。場所変えよつぜ。」

俺以上にシャイな良は、周りの目が気になりだして黙つてついてきた。

「さあ、言えよ。いつから付けてたんだよ？同じ格好で来たのはどうこう意味だ？」

俺達は映画館に隣接する百貨店の中の喫茶店に入った。コンタクトレンズを外して、いつもの瓶底メガネをかけると少しは別人に見えてきた。

「そんなに怒んなよ。気になつてついてきただけじゃん。お前こそ、何で彼女泣かせたんだよ？」

俺も負けずに良の顔を睨み返す。その言葉に良は少し怯んだ。

俺達が座つた窓辺の席は窓から外が一望できて、なかなかいいロケーションだ。

その窓に「コツン」と頭をもたれて、良は溜息をつく。

「映画が終わるまでいい感じだつたんだよな。終わつたところでいきなり、好きだつて言われたんだ。」

「何だと？」

俺は少し顔色を変えた。

身代わりの良と上手くいってしまつたら本末転倒じゃないか。  
俺の動搖に気が付いた良は、慌てて両手をバタバタ振つた。

「いや、だから、返事してないつて。これじゃ、まことにと思つて、  
お前と付き合える子がどうか聞いてから返事しようと思つて、先に  
質問したんだ。」

「何を？」

「だから、同性愛つてどう思つかつて。女の子好きかつて……。  
」

俺は立ち上がりて被つていたキャップを掴むと、このボンクラの頭  
を思いつきり引っ叩いた。

「でめえ、バッカじやねえのか？ どう流れでそのネタが突然出  
て来るんだよ？ 不自然だろ！」

「お、落ちつけたら……。確かに僕はバカだったよ。でも、そ  
れを打診するのが今日の目的だろ？」

「空氣読めよ。せっかく告白したのに返事がソレじゃ、バカにして  
んのかつて思つだろ。」

俺の言葉に良はハッとして口を押さえる。

「そ、そうか……！ 確かにそつだね。彼女、それで怒っちゃつた  
んだ。」

この天然ボケが……。

でも、仕方ない。

こいつは女の子とデートなんてしたことなかつたんだから。

俺は頭にキャップを被せて、溜息をつきながら座り込んだ。

人選がまずかった。

女心を読むには、良は経験値が低すぎる。

「やつは言つけどせ、僕はお前の為に良かれと思つて先に聞いておこうと思つたんだ。お前こそ彼女と接触したのか？ いつからつけて来たんだよ。」

負けずに良も反撃に出てきた。

痛いところを突かれた俺は、少し歯切れ悪く小さな声でブツブツ答える。

「・・・最初っからだよ。お前らがマクドでヨタ話してる時はパーテーションの裏のテーブルにいたし、映画館の中は最後列にいた。今度は良が血相変えて立ち上がる。

「じゃあ、ずっと見てたのか？ もしかして話も？」

「・・・断片的には。ああ、ギターのセッションはやつてもいいよ。でも、海は勘弁・・・。」

途端、今度は俺の頭に良のキヤップが叩きつけられる。興奮で真っ赤になつて肩で息をしながら、良が怒鳴つた。

「お、お前、悪趣味にも程があるぞ！ 恥ずかしいじやんか！」  
「何で？ イイ感じだつたじやん？ お前だつてまんざらでもなかつたクセに。」

「そういう問題じやないだろ！ 人権侵害だ！ 僕だつて初めてのデートで必死でやつてたのに・・・。」

途中、涙声になつて良は椅子に座り込んだ。

その時、俺達が注文した緑色のクリーミーソーダをウェイトレスのお姉さんが持つてきた。

そっくりな俺達の顔を見比べて、面白そうに微笑みながらクリームソーダをテーブルに並べて、お姉さんは去つていった。

「・・・そんなに怒るなよ、良。頑張つてくれた事には感謝してるから。」

さすがに少し申し訳なくなつて俺は一応そういう言つてみる。

良はキヤップを握り締めて、顔を抑えた。

「・・・でも、結果的に大失敗だよ。怒り切って帰っちゃつたんだから。彼女に悪い事したかな・・・。」

「お前だけのせいじゃないよ。俺もまことにしたしちゃ・・・。」

「その言葉に良はハツとして起き上がつた。

「そうだよ、お前いつ、彼女に会つたんだ?僕のふりして顔見せたのか?」

僕のフリはないだろ。

お前が俺のフリしてゐるくせに。

俺は渋々、告白した。

「・・・女子トイレに泣きながら駆け込んできたから、映画見て泣いたやつたんだと思って・・・。

個室に引き摺り込んで、キスした。」

「な、何だつてえ!???」

良は顔面蒼白で立ち上がつた。

「ありえない！そんなことしたら怒るに決まってるだろ！初対面の女の子だぞ！？」

「怒らないよ。だつてお前のこと好きだつて言つたんだろ？好きな男にキスされたら、どんな女だつて喜ぶぞ。お前がなかなか手を出しそうもないから、手伝つてやろうと思つたんだ。」

「余計なお世話だ！てか、何だよ、その男尊女卑思考は！全ての女がお前みたいなアバズレだと思つなよ！』

「何だと、このやうう！」

俺も思わず立ち上がり、良の胸倉を掴んだ。

今回は良も負けていない。

掴んだ俺の胸倉を掴み返す。

クリーミーソーダの載つたテーブルを挟んでそつくりさんが一人で掴み合つてゐるのはさすがに人目を引いた。

さつきのお姉さんが、様子を伺つて厨房からチラチラ見ついている。

俺は舌打ちして、良を離した。

「止めとこ。今更、僕らが争う意味がないよ。結局、嫌われちゃつたんだから。」

「・・・そうだな。」

低い声で言つた良の言葉に俺も同意した。

百貨店を出ると、外はもう薄暗くなつていた。

湿気の多い空氣で空は濁んでいたが、一番星が見える。

俺達はお互ひ無口で、家路に向つ市バスに乗つた。

二人掛けのシートに並んで座ると、乗車していく客が必ず振り返つて苦笑する。

双子がそんなに珍しいか。

かと言つて、どうする事もできないので俺はキャップを田深に被つて寝たフリをした。

「・・・せめて謝りたいね。連絡先、聞いておけば良かつた。」

隣で良の声がした。

窓に頭をくつつけて外を眺めている。

「・・・遅せえよ。向こうがまた電話してくるの待つしかない。」

冴えない一人だった。

神様がバチを与えたに違いない。

でも、一番傷ついてるのは彼女だろうな。

俺はキスした時の彼女の唇の柔らかさを思い出していた。

震えてたけど、懸命に応えようとしていた。

悪いことした。

でも、どうせ結果は同じだつただろ?。

俺が女だつて言つた時点で、結局は終わるんだから。

早いか、遅いかの違いだ。

俺は自嘲してまた目を瞑つた。

その夜、俺はまた良を求めた。

いつもの熱さと虚しさが俺を襲つてきたからだ。

俺達は、一部屋のアパートで二ベッドを別々の部屋に置いて生活していた。

一応、性別の違う俺達を考慮した親がやつてくれたことだつたけど、

俺は自分のベッドで寝たことなどとなどなかった。

「…………良。起きてる?」

寝ている良に一応、声かけてみる。

その声で、良は薄目を開けた。

返事を待たずに、俺は良のベッドに潜り込む。  
薄い布団の中の良の体は、少し汗ばんで濡っていた。  
眠っていたせいで、体温が上がっている。

良のシャツの下に手を這わせて、俺は良の胸に顔をくっつけ。  
心臓の音が、俺の焦燥感を少し和らげてくれた。  
俺の頭を良の腕が抱きしめた。

「…………また、体が熱いの?」

半分、寝ぼけたような良の声がした。

「…………うん。」

今日はテンションが上がらなかつた。

いつもの体の熱さに加えて、ものすごい脱力感と絶望。  
この先、俺を愛してくれる人には巡り会えないんじやないかつていう不安と焦燥感。

常に俺を支配している様々な負の感情が一気に押し寄せてきて、俺は押し潰されそうになる。

俺は体を起こして、良に口付けた。

良は黙つてそれを受け止めてくれる。

こいつは自分から絶対、アクションを起こさない。

俺がされるのが嫌いなのを知つてゐるからだ。

散々酷い目に逢わせてきたのに、俺が求める度、凝りもせず口を提供してくれる。

供してくれる。

「・・・どうしたの、優？元気ないね。」

良がキスの合間に問いかけた。

悔しいけど、見抜かれてる。

コイツには弱みを見せたくないのに。

俺は自嘲的に笑つた。

「・・・ないよ。いつもみたいなのが希望なら悪いけど。」

そういうつた俺の言葉に良は笑う。

「アレは僕の希望じゃないよ。今日ははどうしたいの？」

「分かんない。誰かにしがみ付きたい。」

俺は良の首に腕を回して抱きついた。

その俺の背中を良の両腕が抱きしめる。

適度な拘束感が俺を安堵させる。

良は時々、俺の考へてる事が聞こえてるんじゃないかと思つべからい、

俺の希望を忠実に実行する。

生まれる前からの付き合いだからなのか、元から姉さん女房的な世話焼きの性格故か。

良がいないと俺は壊れてしまつ、と思つ。

でも、こいつが俺が望む相手ではないことも確かだつた。

残念だけど。

「良。俺、病氣じゃないつて言つたけど、やっぱり病氣かも。」

「・・・何の？」

「セックス依存症。お前の体がないとダメ。」

俺の返事に良は苦笑する。

「何だよ、それ？」

「お前がいないと俺、ヘンになりそうだ。この先、誰にも愛して貰えなくて、一人で生きてくのかつて思つたら怖くて・・・。」

俺の背中に回した良の両腕に力が入る。

俺を安心させるために、良の優しい声がした。

「依存しちよ。僕で良かつたら。」

本当は自覚している。

強がつても、俺はいつも寂しくて怯えている。

俺を愛してくれる人なんかいる筈ないって、もつもつと前から分かってるんだ。

俺はその苛立ちを良にしがぶつけることが出来ないでいた。

良にキスを続けながら、俺は今日の女の子のことを考えていた。

あの時。

最後列で一人を観察しながら、俺は映画が終わる少し前に席を立つた。

トイレで用を済ませ、手を洗つてると、さつきまで良と肩を並べて映画を見ていた彼女が泣きながら飛び込んできた。

俺は咄嗟に個室に隠れた。

彼女はヒックヒックとしゃくり上げながら、化粧が溶けて真っ黒になつた目を必死でハンカチで拭いていた。

拭けば拭くほど、目の周りが黒く汚れていぐ。

俺は可笑しくて苦笑した。

近くで見ると本当にかわいらしかつた。

ブリーブリの乙女ワンピースがこんなに似合つ子は見たことがない。

白い肌が泣き濡れてピンク色に染まつてゐる。

鏡越しに、彼女と目が合つた。

びっくりして振り返つたあの顔。

その後は、もう衝動に駆られるまま、俺は動いてしまつた。

あの子とは、どの道、縁がなかつたんだろう。

自分が欲しいものを手に入れるのが、どれほど困難なのかを、俺はもうずっと前から知つてゐる。

俺は黙つてされるがままになつてくれて居る片割れを見た。良は優しい。

でも、こいつの顔を見ていると、往々にして俺は凶暴な欲望に駆られる。

良が苦しがつて喘ぐ姿は、すなわち俺だ。

俺は女っぽいその表情を見ると、ヘンな氣になる。

俺が苦しめて抹殺したいのは、自分自身なのかも知れない。

いつの間にか着ていたシャツは消え去り、汗ばむ体を俺達はお互にすり合わせていた。

「ねえ、優。もし、あの子が、お前が女でもいって言つたらひさき合つつもりだつた?」

暗闇の中で良の声がした。

良の首筋を噛みながら、俺は笑つた。

「・・・言つ訳ねえよ。最初つから分かつてた。そんなヤツ滅多にいないんだから。今日は女がいないお前にいい思いをさせてやるひつと思つただけだよ。」

俺の言葉に良は無言で、ただ、俺の髪をなでた。負け惜しみだつて完全にバして居る。

「お前はどうすんだよ?もし、俺に彼女ができたら。妬けるか?」「・・・妬けるよ。その子を殺してやりたい。」

冗談で言つたその質問の返事が、直球で返つて来て、俺はビビつた。いつもヘニヤつとしている良が、こんな過激な発言をするのは珍し

い。

「何だよ。へンな事言つなよ。」

「お前は男でも女でもないんだろ？僕がお前を好きじゃ悪いか？」

「・・・お前、おかしいよ。男とか女とかの前に俺達、双子だろ？」

「だつたら、何で兄とこいついう事するんだよ？お前こそ、おかしい

「み。

俺達は笑つてまたキスを繰り返した。

どつちも病んでるのは、間違いない。

生まれる前から一緒にたこの片割れが不可欠なことは、お互いに自覚していた。

どんな昨日の後にも、必ず朝は来る。

初夏というより、真夏の朝日が顔に当たつて、俺は目を覚ました。

横に寝ていた筈の良はもういない。

気がつくと、ドリップしたコーヒーの香りが狭い部屋に充満している。

「優、今日、月曜日だよ。一講田ある？

良が台所から顔を出した。

いつものダサイポロシャツに瓶底メガネ。

かつこいいつもりなのか、シャツはジーンズの中に入れてベルトをしている。

大学で俺達が双子なのを知ってるヤツは実はあまりいない。  
学部が違うと、会つこともないし、そもそも俺はあまり大学に行つ

てない。

留年しない程度には出席しているが、必要最低限だ。だから、俺が女だつて知ってるヤツも殆んどいない。

「・・・ある。今日は出席取られるヤツだから、行く。」

俺は素っ裸のまま、良の脇を通り過ぎてユーニットバスに向った。

大きめTシャツとカーゴパンツに着替えて、俺はいつも椅子に座つた。

いつも大きめの服を着ているのには理由がある。体の線を見せたくないからだ。

幸い、俺は女にしては大柄で、胸もお尻もペタソコのまま大きくなつた。

でも、かと言つて本物の男に比べたら、あちこち細くてピッタリした服装をしていたら、バレてしまう。

大学であまり喋らないのも、そのためだ。喋つても元から低い声だからバレることはそうなかつたけど、俺は自分の声が嫌いだつた。

よく似てると言わるのが、富崎アニメに出てくる少年ヒーロー声。中途半端な中性的な声は、俺自身を象徴しているかのようだつた。

自分の中の女性の部分を完全否定するつもりはない。

どんなに足搔いても俺は女だし、それについてジタバタ抵抗するほど子供でもない。

見かけはこんなでも毎月生理は来るし、こんなにナヨな良にも力ではもう敵わないことも知つている。

でも、自然体でいると、普通に男っぽくなつてしまつし、好きになるのもいつも女の子だつた。

ただ、それだけだ。

俺は精神病でもないし、意地を張つて男になろうとしているつもりもなかつた。

良の入れたコーヒーに口をつける。

良は俺のためにベーコンエッグを作つて、トーストと一緒にテーブルに並べた。

かいがいしく給仕をする良を俺は眺めながら思つた。

こいつこそ、本当は女に生まれたかったに違いない。  
口には出さないけど。

後片付けするから先に行つて、と言つ良をアパートに残して、俺は自転車で大学に向つた。

日差しがかなり強くなつてきている。  
今日も暑くなりそうだ。

一講目の授業が始めるまで、まだ30分ほど時間があつた。  
することもないので、俺は軽音部のクラブハウスに向つた。  
大学の校舎から少し離れた場所にコンクリートの二階建ての建物がある。

クラブ活動やつてゐる奴らの着替えスペースになつていた。

俺の所属する軽音部は、登録している人間はそれこそ100人くらいはいるんだけど、ここに集まることは1年に1回くらいだ。もつぱら、楽器や機材置き場として利用することが多い。ここで知り合った仲間と各自バンドを組んで、個人的に活動するのが殆んどなので、ここに集まる必要はないのだ。

俺は誰もいない軽音部のクラブハウスのドアを開けた。

熱気と埃が溜まった部屋の窓を開け放つ。

誰もいないクラブハウスは、夏休みに一人できてしまつた教室みたいな静けさだ。

俺は誰もいない軽音部のクラブハウスのドアを開けた。

誰かが置いたままにしているアコースティックギターを見つけて、俺は椅子に座つて構えた。

抱えたアコギの上に肘を乗せて頬杖をついて、昨日の出来事を思い出してみる。

抱きしめた女の子の柔らかい感触、シャボンの香り、小さな甘い声。何となく、メロディーが浮かんだ。

俺をいつも呼んでくれる先日の夜店バンドは、3回生の茶髪のギターボーカル圭介さんが作詞作曲したオリジナルが多かつた。ディープブルやエアロスミスを敬愛している彼の曲は、少し昔のハードロックっぽくて、俺は嫌いではなかつた。

でも、本当に俺が好きなのはアコギやピアノのイントロで始まるような、ベタベタラブバラードだった。

そう、2、3年前くらいに流行つた「You're the only...」みたいな。

あの歌手はそれ以来、一向に見ることはなかつたけど、最初にアレを聞いた時は俺は不覚にも涙が出た。

圭介さんは男性ギタリストらしく、早弾きで命を懸けている。でも俺はギター テクより、心にグッとするラブ バラードを切々と弾くのが好きだった。

きっと音楽の感性は女なんだろう。

「コードを適当に押せえで、俺はメロディーを口ずせんだ。

・・・そういうば、あの子、ピアノと一緒にセッションしたいって言つてたっけ。

俺の曲のインスト、弾いてくれたかな？

昨日、上手くやつてればの話だけビ。

今となつては後の祭りだ。

その時、部屋のドアが突然、勢いよく開いた。

バン！ とこう大きな音に俺はビビつて、慌てて口を押せめる。

ヤベ。

声、聞かれたかな・・・？

そつ思つて、ドアを見て俺は固まつた。

そこには、わざわざ考えていた、昨日の女の子が立つていた。



「ユウさん・・・やっぱり、ユウさんだつた。」

俺は口を押さえたまま、呆然と彼女を見た。  
開け放した窓から吹き込む風に長い髪を絡ませ、彼女はそこに立つていた。

膝丈くらいのフワンとした花柄のスカートにレースの胸元の白い上着。

清楚過ぎて、怖いくらいだ。

彼女はスカートを揺らしながら、ゆっくり俺の方に歩いてくる。  
俺はビビッてアゴギを抱きしめて硬直していた。

な、何でここにいるつて分かつたんだろう。  
てか、何で来たんだ？

まさか昨日の逆襲？

俺の前まで来ると、彼女は優しく微笑んだ。

長い睫毛に縁取られた大きな黒い瞳がキラキラしている。

昨日、俺がキスしたピンク色のポテつとした唇は今日も健在だ。  
そのかわいさに、俺は呆然とてしまう。

何で、こんなかわいい子と俺が同じ女なんだろう。  
神様の悪戯なら、もう反則だ。

彼女は今だ硬直している俺に話しかけた。  
高い、かわいい声はカナリアみたいだ。

「さつき、校門の前で夜店バンドでボーカルやつてた茶髪の人には会

つて、コウさんが軽音部だつて教えてもらつたんです。暇な時はよくここにいるつて。そしたら、ギターの音が聞こえて……。あたし、合唱部だから、実は隣の部室に時々来るんですよ。今まで逢つたことなかつたですよね。」

・・・合唱部？

俺がここでギター弾く度、やかましい一いつて怒鳴り込んでくるあの煩い女どものクラブか？

何か言おうにも、今喋れば昨日の良の声と全然違つのがバレてしまう。

俺は黙つて首だけ縦に「ククク」振つた。

「昨日は、引つ叩いたやつでごめんなさい。しかも、突然帰つちゃつて……。あたし、断わられちゃつたのが悲しくつて。でも、ありがとうございます。楽しかつたです。彼女じゃなくとも、これからもお友達になつてくれませんか？」

恥ずかしそうに彼女は言つた。

昨日のあの後、この態度。

なんて人間できた女の子なんだ。

でも、俺達は断わつた訳じゃない。

ややこしいことしたのは申し訳なかつたけど、全ては誤解の連鎖だ。俺は力バンから筆記用具を引っ張り出して、メモ帳に殴り書きした。

「断つてない！へんなことして、ゴメン…」もつ一回付き合つてください！

彼女は殴り書きを見て、はつと口元を押された。  
そして、俺をまた見つめる。

「・・・どうして紙に書くんですか？」

素朴な疑問だ。

俺はお約束の答えをまた書いた。

「風邪ひいて声がでません 今日はしゃべれません

それを見て、彼女は心配そうに眉を寄せた。

「大丈夫ですか？もしかして、昨日のせいですか？」

「くつそお、面倒くせえ！」

俺はまた紙に書き殴る。

「大丈夫です、それより、海いこう。来週日曜日の朝9時に昨日のマクドナルド前、水着と弁当持参で集合、OK？」

彼女の顔がぱつと明るくなつた。

花が開花したような笑みが浮かぶ。

「嬉しい・・・！あたし、てっきりコウさんに断わられて、遊ばれたらんだつて思つちゃつて・・・。OKです！来週、楽しみにしてますね。」

彼女はアゴギにしがみ付いている俺の手を取つた。

その柔らかい感触に俺は赤面してしまつ。

動搖した俺の手からノートがポトつと床に落ちた。

「左の指先、荒れますね。ギター頑張つてるんだ・・・。今度、ピアノとセッションして下さいね。」

俺は動搖しながら、コクコクとバカみたいに首を振った。

その時、再びバターン！とドアが開く音がした。

「おーい！コウ、いるかあ？さつき、かわいい女の子がさあ、お前のこと……！」

デカイ声で笑いながら入ってきたのは、茶髪のボーカル、圭介さんだった。

手を握りあつて見つめ合つてる俺達を見て、圭介さんは口を押さえて硬直する。

「あ・・・『ごめん！お邪魔しました！』

そう言って慌ててドアを閉めようとすると。

可哀相な彼女は湯でダコのように真っ赤になつて、俺の手を放すとドアに向つてダッシュした。

そのままの勢いで、圭介さんをドーンと突き飛ばすと、部屋を飛び出していく。

まだ、アコギを抱きしめて固まつている俺を見て、圭介さんは遠慮なくアハハ・・と笑い出した。

「『ごめん、『ごめん！邪魔して悪かつたよ、色男！』

全然、悪いと思つてない……。

俺は恨めしそうに彼の顔を睨んだ。

でも、まあ、いいや。

次のアポは取れた。

後は、また良に行かせて『機嫌取らせればいい。

俺はまだ彼女の手の感触が残る手を握りしめた。



「で、何でまた僕が行くんだよ。」

夜、アパートに戻つてから俺はキッチンにこいた良に今日の出来事を話した。

再び身代わりをお願いすると、良は完全にうんざりした顔で溜息をついた。

そう言ひと思つた。

俺は気にしないで話を続ける。

「いいじやん。今度こそ彼女を喜ばせてあげたいんだ。俺はもう余計なことしないからや。頼むよ、あと一回だけ。」

俺はスリスリ手を合わせて良を上目使いで見つめる。

反則技、女の武器だ。

この作戦にこいつが弱いのは昔からよく知つてこる。

良はキッチンのテーブルに頬杖ついて、缶ビールを揺らしていた。グイっと一口いった後、俺をビン底メガネの奥の赤い目で睨む。ちょっと酔つてるとみたいた。

こいつが悪酔いするのは珍しい。

「・・・お前、結局、何がしたいんだよ？」

「何つて？」

「僕がお前の代わりに行く事に何の意味がある？あの子と付き合いたいのは僕じゃない、お前だ。

あの子が好きなのもギタリストのお前だらっビリじて、話をややこしくしたがる?」

「それは、前に言つただろ。俺は・・・女だつて分かつてから逃げられるのが怖い・・・。」

言つてから、自己嫌悪になる。

良を身代わりにする事で俺は執行猶予を伸ばしてゐるんだ。まだ、希望を持つていていいから。

そんなことは自覚している。

ただ、夢を見ていたいんだ。

良があの子と仲良く歩いている姿に、俺は自分を重ねていた。

「僕はそれが意味がないって言つてるんだ。お前が女なのは『まかしょひのない事実だ。それを隠したまま付き合える筈ないだろ?』」

いつになく厳しい良の言葉は、俺の胸に刺さつた。

「何だよ・・・行きたくないってこと? 嫌ならいいよ。」

「じゃあ、どうするんだよ? お前が海水パンツで行くのか? それとも断わる?」

理屈っぽく絡んでくる良に俺はムカつき始めた。

ナンなんだよ、今日は。

いつものナヨつちい良じやないみたいだ。

ビールが悪影響を与えてるのかもしれない。

「あー! もう、ウザつてえな! いいよ、もう一お前には頼まない!」

俺は面倒臭くなつて良に向つて怒鳴つた。

良は俺を赤い目で凝視して、少し笑みを見せた。

なんか嫌な笑い方だ。

よく俺がやる悪い力オ。

完全に酔つてやがる。

「優、賭けしようつよ。僕の言つ条件を飲んでくれたら、僕は身代わりになる。」

不敵な笑みを浮かべて良は言った。

「・・・何だよ?一応、聞いてやる。」

「僕が思うのは、彼女だつて僕のことが見抜けないようじや、お前が好きだつて言う資格ないだろ?本当にお前のことが好きなら、別人だつて気が付かなくちゃ。」

「・・・だから、何だよ?」

良は立ち上がり、ベッドに腰掛けていた俺の横にやつてきた。体が触れ合つくらいに近い距離に腰掛ける。

アルコールで体温が上がっている良の熱い腕が俺の腕に触れた。

「彼女を海に連れて行くよ。そこで一緒にいる間に、彼女が別人だつて見抜くことができたら、お前は彼女にカミングアウトしてから告白しろ。ちゃんと姿を見せてだ。」

「・・・できなかつたら?」

良は俺を真つ直ぐに見つめて、はつきり言つた。

「彼女のこととは忘れて、僕と一緒にいて欲しい。お前流に言つながら、僕にもやらせりよ。」

「おい・・・何、冗談言つて・・・。」

言いかけた所で、良のキスが俺の口を塞いだ。

ほら見る。

病んでると云つても、俺はまだ普通だ。

一番、病んでる・・・いや、もはや狂つてるのは、この双子の兄貴の方だった。

良は無意識に逃げようとする俺の頭を抱き寄せ、強引にキスを続ける。

その圧倒的な腕力に、俺は少し怖くなつて良の熱い体を押し返そうとした。

だけど、それが全く無駄な抵抗だと分かるまで、時間はかからなかつた。

「・・・お前、何言つてんだよ？酔つてんのか？俺は一応、お前の妹だつて。付き合つとか、無理だから。それに俺が好きなのは女の子なんだ。お前じやない・・・。」

これはジョークだろ？

引きつった笑いを浮かべて、俺は言おつとしたけど、良のキスがまた俺の言葉を遮る。

ダメだ。

完全にイカれてる。

「・・・知ってるよ。僕は、お前が男でも、女でも、妹でも、何でもいいんだ。残念だけど、女のお前と付き合つ女の子なんて滅多にいないよ。自分が一番分かつてんだろ？いなかつたら、どうする？一人で生きていくのか？」

畳み掛けるように吐き出される良の言葉は、弱つている俺の胸にズキズキ突き刺さる。

一番、俺が恐れている言葉だつた。

それを、一番言われたくない相手に言われた俺は、良を突き飛ばして思わず立ち上がった。

「うるせえ！てめえに言われる筋合いはねえよ！人の気も知らないで勝手な事言うな！」

普通なら、ここで良が黙り込んでケンカは終了するのだが、今日は良も黙つてなかつた。

俺と同じように立ち上がり、真正面から俺を見つめる。

「優は覚悟が足りないよ。お前は男でも女でもないんだろう？マイノリティとして生きていくな、孤独は付きまとつさ。一人で生きていいくのが怖いなら、女の子に戻ればいい。」

冷静に正論を語る良に、俺は完全にキレた。

胸倉を掴んでグイっと顔を近づける。

こいつに俺の気持ちが分かつてたまるか・・・！

好きでこんな風に生まれた訳じゃない。  
自分でもコントロールできないんだ。

女の子になれつて言われてなれるもんじゃないんだつて・・・。

気が付いたら、俺の両目から涙が溢れていた。

悔しい・・・悔しい・・・！

良なんか、俺が欲しかつた体も持つてて、俺より力もあるじゃないか・・・。

俺の気持ちなんて分かりっこない。

俺の涙に怯むことなく、良は胸倉を掴まれたまま、俺を抱きしめる。振り払おうと抵抗したけど、もう良の力には敵わなかつた。

中学生までは、まだケンカで負けたことなかつたのに・・・。いつの間にこんなに強くなつてたんだろう。

抱き締められた俺の耳元で、良の熱い息がかかる。

アル「ホールの匂いと、熱い息遣いとともに、良の低い声がした。

「優、僕はお前が好きなんだ。だから、僕は覚悟してる。お前が一人で生きてくのが怖いなら、僕を道連れにすればいい。お前が一人にならないように、どこまでも付き合つから。」

キザな台詞に俺は泣きながら、鼻で笑つた。

「嘘言うな！お前だつて女ができるば、俺のことなんてどうでも良くなるや。その後、俺はどうしたらい？」

俺はな、今まで何度も女に逃げられてんだ。多分、この先もな。一人にされた時の辛さがお前に分かるか！」

なんか、俺、みつともないこと怒鳴つてるな・・・。  
ただのモテない男みたいだ。

でも、もう暴走した感情をコントロールすることはできなかつた。ヒステリーを起こして腕の中でもがく俺を、良は抱きしめたままベッドに押し倒した。

俺がいつもするみたいに、Tシャツの中に手を入れると俺の体の線をなぞるように滑らせる。

体温の上がつた熱い良の掌が素肌に触れると、ヒートアップしていだ俺の感情が不思議なほど静まつていつた。

「だから僕を連れて行け。お前を一人にしないから。ずっと、お前と一緒に生きてやるよ。」

銀縁メガネの奥の俺と同じ瞳は、全くブレることなく俺を見つめていた。

その言葉に、俺の体の方が先に反応する。

認めたくない。

でも、俺の中の女性の部分、一番弱い部分にその言葉は突き刺さつた。

平たく言えば、嬉しかったんだ。

俺の中の弱い女の部分が、男の良にすがりつとしている。

でも、待てよ。

俺が好きなのはコイツじゃないだろ？

俺の冷静な部分がそう問いかける。

俺はどうちが自分なのか、分からぬ。

往々にして起るこの現象に、俺はいつも振り回される。

俺の体にぴったり当てられた良の掌は、体中をなぞった後、僅かな胸の突起に触れた。

意思とは無関係に反応してくる体に、俺は動搖する。

ある事実に俺は気が付いた。

それは今まで、女の子としてサレたことが無いって事。

このまま続いたらどうなっちゃうのか、自分でも分からぬ。

俺は、覆いかぶさつている良の腹の下に両腕を差込み、渾身の力で押し返した。

「ま、待て……お前の言つことは分かった。その賭け、乗るよ。彼女が気付いてくれたら、俺は彼女の前に現われる。気付いてもらえなかつたら、お前が俺を好きにすればいい。今までのお返しだ、ヤラれてやる。

だから、今は勘弁してくれ・・・！」

最後は助けを求める患者みたいな涙声で懇願する俺を、良は笑つて見下ろした。

そして、ホールドアップされたみたいに両腕を上げてゆっくりベッドから離れる。

俺はやつと自由を取り戻し、ガバッと起き上がつた。

体中に鳥肌が立つてゐる。

今のが、悪寒だったのか快感だったのかは分からなかつたけど。

「了解。約束だよ。言つとくけど、僕も本気モードで行くからね。」

憑き物が取れたような、いつもの邪氣の無い顔で良は笑つた。

## 19話（後書き）

19話まで読んで下せつた方々、ありがとうございます。  
ここで、第3章終了です。  
次の展開にご期待ください。

決戦の日曜日が来た。

優とは今週中、全く口をきかなかつた。

あの夜から、優は今まで使つた事のなかつた自分の部屋のベッドで寝るようになり、食事の時もテーブルに向い合ひ僕には皿を合わせないようにしていた。

それがあまりに露骨なので僕も気まずかつたんだけ、今回は僕から折れるつもりはなかつた。

僕は優が好きだつた。

それも女の子として。

いつも言つてゐるのに、あいつが今まで受け止めなかつただけだ。たまたま、きっかけがあの女の子の出現になつただけで、いつかは僕が切り出していたことだつた。

優に彼女ができたら殺してやりたいつていうのも、本氣だつた。病んでるというより、もう狂つてるのかも知れない。

そう思われても全然構わなかつた。

16才の時、初めて優と一つになつてから、僕は失われた自分の半ピースを取り戻そうとしていた。

シャワーを浴びてから、コンタクトレンズを装着し、優のいつもの服を着る。

長めの前髪をかきあげ、悪そうな顔をしてみると、我ながらウリーつだ。

考えたら、優が彼女と顔を合わせたのはライブの時とトイレの個室、

そして軽音部の部室だけだ。

その間、一言も言葉を発してないんだから、本人か別人かなんて分かる訳ない。

この賭けはデキレースだ。

僕は、完全に優に分の悪い勝負をしてでも、彼女を諦めさせたかった。

僕が嫉妬に狂いそうなのも一理あるけど、それ以上に優に悲しい思いをさせたくなかったからだ。

一応、ノーマルな僕から言えば、優と一生添い遂げる女の子はこの世にはいないと思われた。

優には辛い事実だと思うけど、それが現実だ。

だから、僕が優と一緒に生きていく。

16歳のあの日から覚悟はできていた。

隣の部屋から、アコースティックギターの音が聞こえてくる。優はもう起きてるらしいが、部屋から出て来ない。

僕は、一人の部屋を遮る襖をノックしてから、そっと開く。

「優、僕、そろそろ行くよ。」

ベッドに座つて、ギターを弾いていた優が、僕の声に顔を上げる。何か言いたげな顔で口を開いたが、すぐに俯いてしまった。

「彼女に何か、伝えたい事ある？」

僕の問いかけに、優は再び顔を上げた。

「……俺、曲作ったんだ。もし、今日、彼女が気が付いてくれたら……インストロのピアノ伴奏をお願いしたいって……言ってくれる？」

「一応、聞くけど、どんな曲？」

僕の質問に優は少し笑って、髪をかきあげた。

「ベタなラブソングだよ。付き合うことになった暁には、俺がある子に歌つてやる。」

「その凛々しいヒーロー声で？」

「ああ、もう隠さないよ。」

「ああ、もう隠さないよ。」

思いがけず勝気な表情で、優は僕を睨んだ。

まだ、全然諦めてないんだな。

僕も不敵な笑みで、それに応える。

「伝言は伝えるよ。彼女が気付いた時にね。」

「良、公平にジャッジしろよ。」

「分かってる。でも、お前が負けても文句なしだ。その時は覚悟しつけよ。」

「……何のだよ？」

優は、僕の真面目な返事に苦笑した。

僕も思わず顔が緩む。

ダメだ。

私情は禁物だ。

緩んだ顔を引き締めて僕は言った。

「待つてろよ、お前にスカート履かせてやるー。」

そう言い捨てて、僕は物が飛んでくる前に襖をピシャっと閉めた。

アパートの駐車場に僕は向つた。

昨日から借りているレンタカーがそこに置いてあるからだ。

こんな僕だけど、意外にも車好きだ。

高校3年生の時、18歳になるのを待つて、僕はすぐ教習所に行つた。

もちろん、学校には内緒でだ。

下宿を始めてからは車に乗る機会は、実家に帰つた時だけになつてしまつたけど、それでも時間があれば、一人でドライブしていた。優にはそういう興味がないらしい。

その点はやはり女の子なんだろうか。

優の変化するキャラが、僕には今だによく把握できなかつた。優自身も、分からんんだろう。

どうせなら大好きなスポーツカーにしようと思つて、借りたのがこの白いスカイライン。

GTRではなかつたけど、形だけは僕の好きなものだつた。

女の子だつてかつこいい車に乗りたいに違ひない。

僕はエンジンをかけてクラッチを踏み込む。

待ち合わせの駅前のマクドナルドに向つて、スカイラインは爆音を上げて走り出した。

駅前は人でごつた返していた。

交通量も増えて、マクドナルドの看板は見えてるのに、なかなか前に進まない。

窓を開けてぼんやり前方を眺めていると、歩道をひたむきに向って駆けてくる女の子が見えた。

長い髪をポニー・テールにして、白いワンピースと麦藁帽子。サンダルを履いた真っ白な素足が眩しい。

間違いなく、美咲ちゃんだつた。

大きな手提げカバンを重そうに、肩に掛けている。

あれは、ぼくが頼んだ弁当だと直感した。

彼女は渋滞で止まっている車の助手席に素早く乗り込んだ。ドアを閉めた途端、シャボンの香りが車の中に漂う。不覚にも、僕の鼓動が速くなつた。

「ゴウさん、ありがと」「やれこます。本当に海に行けるなんて思つてなかつた。嬉しいです！」

無邪気な顔で美咲ちゃんは笑う。まさか自分が別人とデートして、それが賭けのネタにされてるなんて、夢にも思つてないだろ？

「僕も嬉しいよ。じゃあ、海に行きますか。」

精一杯の笑顔を作つて、僕はギアを握り締めた。

海開きしたばかりの海水浴場はカップルや家族連れで結構込み合っていた。

僕らは浜に近い草むらの臨時駐車場に車を止めて、人でごった返す海岸へ向った。

ビーチサンダルに熱い砂が歩く度にかかって、気持ちがいい。海なんて何年ぶりだろう。

今日の目的も忘れかけて、僕のテンションは上がってきた。

僕は、横を歩いている麦藁帽子の小さな女の子をチラリと見た。白い顔がピンク色に染まって、鼻の頭に汗をかいている。

横顔を見ると、長い睫毛が良く目立つ。

文句なしにかわいい女の子だ。

優がいなれば、僕がお付き合いしたいくらいだった。

考えたらそういう選択肢もあるだろ。

僕がこの子と付き合うことになるって危惧は、優は持たなかつたのだろうか。

「ね、ユウさん。今日は泳げるんですか？」

僕が黙っていたら、彼女が突然、話しかけてきた。

気を遣つてくれているに違いない。

僕は、慌てて笑顔を作る。

「泳げるよ。どうして？」

「ユウの前、胸に傷痕があるから、海パンになることはできないって言いましたでした？」

彼女は心配そうな顔で僕を覗き込んだ。  
「いや、そんな話したつけな・・・。  
すっかり忘れていた僕は、もう開き直るしかなかつた。

「大丈夫。もう治つたから。今日は美咲ちゃんと泳げるよ。」

小首を傾げて彼女は少しヘンな顔をした。

嘘だつたのがバレバレだ。

「じゃ、何で、ヘンなこと言い出したんですか?」  
まだ食いついてくる彼女に、面倒くさくなつた僕は彼女の首に腕を  
回して抱き寄せた。  
その耳元にこつそり囁く。

「ボディに自信がないからだよ。」

それは、当たらずしも遠からじな言い訳だった。  
顔を真っ赤にして、彼女は僕を見つめる。

思い詰めた様に沈黙した後、彼女は口を開いた。

「あたし、そんなこと気にしません。ユウさんは、ユウさんだもの。  
あたしだつて、自慢できるような体じゃないし・・・。大丈夫です。

」

真剣に話す彼女に僕は好感を持った。

今の言葉を優が聞いたら、泣いて喜ぶだろ?」。

素直な子なのはすぐに分かるんだ。

でも僕にとつては恋敵になるんだから、正直、複雑な心境だった。

海岸線上に軒を連ねる浜茶屋でビーチパラソルと敷物を借りて、僕らは砂浜に陣を構えた。

生暖かい潮風がベタつと体をなでていく。

僕は暑さに耐えかね、シャツを脱いだ。

太陽が素肌に照り付け、これぞ夏！といつた感じだ。

気がつくと、彼女も着ていたワンピースを脱いで水着になっている。胸元に大きなリボンのついたピンクのストライプのワンピース。

彼女の真っ白な太腿が顯わになつて、僕は少し眩暈がした。

優と全く違う本物の女の子の素肌を見て、経験値の低い僕はかなり動搖した。

僕の視線に気が付いて、彼女は慌ててバスタオルを巻きつける。

何だか、僕がスケベな顔で見てたみたいで、ちょっと気まずい瞬間だつた。

「あの、せっかくだし、まずは海に入りましょ？その方がお互い、恥ずかしくなくなるかも・・・。」

彼女の提案に僕は激しく同意した。

このまま二人で並んでいたら、鼻血が出そうだ。

僕は彼女の手を取つて、波打ち際に足を入れた。

冷たい海水が膝までかかつて、彼女は笑いながら飛びのいた。

ボンヤリ足をつけている僕にバチャつと水をかけられる。

僕も笑つて水をかけ返す。

彼女の笑顔が弾けて、僕も自然と笑いがこぼれた。

優の大好きなシチュエーションだつただろう。

アイツ好みのベタベタバーラードのPV撮影してみたみたいな二人だつた。

本当はこの僕の役を、あいつがやりたかつたんだ。

そんな日が訪れるとは、永遠にないのに。

一人でゆっくり泳ぎながら、彼女は楽しそうに話しかけた。

「あたしね、ユウさんに会つ前は本当に内気な子だったんですよ。友達だって全然いないんですよ。」

それは僕も優も負けてない。

交友関係の薄さには自信がある。

「僕もだよ。でも、ライブの時、よく一番前で見てたね。あんなところで真っ直ぐ立つてたからビックリしたよ。」

僕は率直な感想を言った。

あの場所で微動だにせず突つ立つてた彼女は内気には見えなかつた。

「あたし、ユウさんのギターに呼ばれた気がしたんですね。」

彼女は真面目な口調で言った。

「呼ばれた？」

「はい。ユウさんのギターは泣いてるみたいで、誰かを探してるみたいでした。寂しくて悲しくて、誰かいなかつて叫んでるみたいだつたの。だから、あたし見てたんですね。ここにいるよつて……。」

「

僕は彼女を凝視した。

女の勘つてヤツなんだろうか。

直感にしては、ユウの心理をズバリ付いたすごい洞察力だ。

僕が黙つたので、美咲ちゃんは恥ずかしそうに顔を赤らめて笑つた。

「あ、変ですね。メルヘン入つちゃつて……でも、あたし勝手に思つちゃつたんです。ユウさんはきっと、あたしと同じ孤独感

を持った人だつて……それを分かち合える人を探してゐるんだつて。」

・・・女つてすごい。

僕は何だかそら恐ろしくなつて、彼女の無垢な顔を見つめた。

海から上がった僕らは、砂の上に挿したままのパラソルの元に戻った。

バスタオルを僕に渡しながら、美咲ちゃんはパークーを羽織つて、弁当を出し始める。

アルミ箔で包んだおにぎりがカバンの中から口口口口出できた。プラスチックの容器にはから揚げだの、タコさんワインナーだの、女の子らしいおかずがかわいらしく入っている。

僕も料理の腕は自信があつたけど、女の子らしい細やかな感性は、彼女の方が上に思われた。

・・・当たり前か。

「どんどん食べて下さいね。早起きして作ったんですよ。」

彼女の笑顔に僕は思わず顔を緩めて、おにぎりを掴んだ。

敷物の上に胡坐をかいた僕の横に、彼女はちょこんと体操座りした。

潮風におにぎりの海苔が良く合つ。

僕らは打ち寄せる波を見つめながら、しばし、おにぎりにかぶりついていた。

「あの、聞いていいですか・・・?」

小さな声がして、僕はパークーを被つた彼女の頭を見下ろす。

「何?」

「・・・映画館でキスしてくれた時、あんたが好きだつて言つてくれましたよね?」

僕はギョッとしておにぎりを喉に詰まらせた。

優のヤツ、そんなことまで言つてたのか・・・。

想定外のシナリオに僕は焦つたが、こうなつたらアドリブで行くしかない。

「うん、言つたよ。あの時、美咲ちゃんが本当に好きだつて思つたんだ。」

「じゃ、じゃあ・・・！」

彼女は僕の顔を見上げる。

その真剣な眼差しに、僕は嫌な予感がした。

「あたし、初めてのキスだつたんです。もし、あれが遊びでなかつたら、あたしの事好きなら、もつ一回お願ひしてもいいですか？」

・・・そうきたか。

僕は返答に困つて、沈黙した。

いくら何でも、別人の僕がそれをするのはあまりにも失礼に思われた。

そもそも、優以外の人間とそういう行為をしたことがないんだから。ヘタクソだつて思われたら、僕だつて立ち直れない・・・。

「美咲ちゃん、それは僕から言おうと思つてたんだ。今田はまだ長いんだから、待つてて、ね？」

僕は彼女の肩を抱き寄せ、耳元で囁いてから、赤く染まつた頬に軽くキスした。

我ながら、上手いじやないか。

恋愛上級者レベルの対応だつたに違ひない。

彼女は僕の言葉に微笑んで、小さな声でハイと答えた。

優が見てたら羨ましがるだらうな。  
いや、殺されるかもしね。

こんな小さなときめきと幸せを、きっとあいっは切望してるんだ。  
可哀相に。

今、僕に寄り添つてこの子だつて、優の正体を知つたら逃げてい  
くに決まつてゐるぢやないか。

美咲ちゃんが僕に好意を見せる程に、僕は優のことを思い出して暗  
い気持ちになつた。

「ユウさんは、どうしてギター始めたんですか？」

再び、黙つた僕を見つめて、彼女が話しかける。  
これはまた、ハードルの高い質問だ。  
何で、あいっはギターやってんだろ?  
他の楽器でも良かつただろう。

「ギターが実家にあつたからだ。

僕は咄嗟に思いついた事を言つてみる。  
でも、ありがちな話だ。  
彼女はクスクス笑つた。

「そつかあ、あたしも実家に母の嫁入り道具のピアノがあつたから、  
習い始めたんですよ。どんな曲が好きですか?やっぱりハードロッ  
ク?」

それは知つてゐる。

あいっはメタルでも、ロックでも何でもやるけど、本当に好きなのは  
は背中が痒くなるようなラブソングなんだ。

「バラードが好きだよ。Say Yesとか、You're th

e only とか、バカみたいに聞いてたな。」

涙を浮かべて聞き入つてた優を思い出し、僕は言った。

「あ、あたしも大好きです。ユウさんてロマンティストなんですね。」

「そうだね。そう思うよ。」

「…………いつまでも二人このまま、強く抱きしめてFairyWay…」

ベタベタな歌詞が頭に浮かんで、僕は背中が痒くなつた。

お弁当も食べ終わつた昼下がり、僕らは着替えて海水浴場を出た。日差しが強くなつて、彼女の肌が焼けるのが可哀相だつたからだ。すっかり打ち解けた彼女は、僕の腕にスルリと巻きついて笑顔を向ける。

本当に幸せそうだ。

女の子って、好きな男と一緒にいるだけで、こんなにかわいい顔するんだ。

このまま彼女が僕を見抜けなかつた場合、僕は優に彼女のこと忘れようと言つた。

と言う事はつまり、彼女が見抜いた場合、僕は退散。優は失恋覚悟でカミングアウト。

見抜けなかつた場合も、今日で最後という事になる。

勝手にこつちの都合で賭けのネタにされ、最終的にはお別れか。僕は、とてつもなく失礼で酷いことを彼女にしている事に、今更ながら気が付いた。

何にも知らない彼女は、荷物をトランクに載せて次に僕がどこに行くのか、ワクワクして待っている。

願わくは、気付いてくれますように・・・。

僕は君の好きなユウじゃないんだ。

「ユウさん? どうしたの?」

苦虫を潰したような顔をしている僕を、小さな彼女が下から覗き込む。

僕は、その可愛らしい小さな顔を両手で包み込んだ。

彼女の顔が驚きと期待で硬直するのが分かった。

濡れた唇にそつと触れて、僕は少しかがんで顔を近づける。

その時。

僕を見つめていた彼女の瞳に動搖が走った。

怯えたような、戸惑ったような表情で僕の手を捕らえて、震える声で言った。

「・・・あなた、本当にユウさんですか・・・?」

「・・・何て言った?」

僕は、そのまま凍りついた。



美咲ちゃんは僕の手を取つて、後ずさる。その目に恐怖さえ浮かんでいるのが、僕にも分かつた。

「み、美咲ちゃん、どうしたの？突然……。」

僕は必死で引きつった笑いを浮かべる。近づこうとする僕を、彼女の両腕が押し返した。

「あなた、本当にユウさんですか？あたし、確か……。」  
彼女は一人で喋りながら、眉間に皺を寄せて両手で頭を抱えた。何かを必死で思い出そうとしている。

「な、何言つてるの？僕はユウだつて……。  
「違います。……つて言つた、あなたがユウさんなら、あの時の人……。そうだ……。」

突如、ハッとした表情になつて彼女は僕に詰め寄つた。

「トイレでキスしてくれたユウさんがギタリストですよね。それが本当のユウさんじゃないんですか？」

僕は硬直したまま、沈黙を続けるしかなかつた。

「どうして分かつたんだ？」

外見は全く同じはずなのに。

でも、ここまで言われたら、もう観念するしかなかつた。

「どうして、分かつたの……？」

擦れた声で僕は聞いた。

彼女はもう一度、確認するように僕の両手を取って、自分の頬に当てる。

スリスリと、僕の掌を顔に滑らせてから、その手を僕に見せた。

「あの時、ユウさんの手に触ったの。ギター弾く人らしく指先だけ荒れてるなってすごく印象に残ってたんす。変な違和感はずつと感じたんですけど、物的証拠がなくて・・・。今、あなたの掌の感触でやつとはつきりしました。あなたはライブに出てたユウさんじやないでしょ?」

言われて僕は自分の掌を見つめた。

そう言えば。

優が僕の体を撫で回す時、荒れた指先が気になつた。ギターの弦を押さえるから硬くなっちゃうんだって、アイツが言つてたことがあつたような・・・。

僕はそんなこと全然気にも留めなかつたから、すっかり忘れていた。

でも、そんな違いに気付くか、普通?  
シャーロック・ホームズじやないんだから。

「よく、気付いたね・・・。」

僕は半ば呆れて、溜息をついた。  
彼女は真剣な顔で答える。

「言つたでしょ?あれはあたしの初めてのキスだつたんです。全て覚えてるに決まつてます!」

僕は苦笑して、両手を上げた。  
完敗だ。

ギタリストのユウに惚れた彼女だから、気付いた事かもしれない。これは優の本質を好きになつたつて、解釈するべきだろ？。僕は今までの良心の呵責から解き放たれ、清々しい気分になつた。

「案外、早くバレちゃつたな。初めまして。僕は宮崎良。優の兄です。」

笑つて挨拶した僕を彼女は呆気に取られて見つめていた。

スカイラインの助手席で彼女は黙つて座つていた。

開け放した窓から潮風が入つてきて、彼女の長い髪がサラサラなびいている。

横目でそれを觀察しながら、僕はギアを握り締める。彼女が黙っているのが非常に気まずくて、握った掌に汗をかいてきた。

「美咲ちゃん、怒つてる？」

「・・・いいえ。」

ムスッとした顔で彼女は答える。うわあ・・・。

怒つてるよ、やつぱり。

でも、彼女にはその権利があり、僕はそれを受け止める責任があつた。

「僕が来たのには理由があるんだ。でも、それは優から直接聞いて欲しい。」

「何の理由ですか？あたしのこと、からかつてたんでしょ？顔が同

じだからってそんなことで遊ぶのは悪趣味です。」「

正論を叩きつけられて、僕はうなだれる。

お怒りは尤もだ。

「美咲ちゃん、今から本物の優に会わせるよ。遊んでやった訳じゃないんだ。ただ、本物の優は僕以上に照れ屋で、デリケートで、感情が激しくて、凶暴で、しかも寂しがりで臆病なんだ。あいつのことを、分かつてやつて欲しい。」

僕の言葉に彼女はちょっとだけ、こっちを見た。

「ややこしい人ですね。」

「そう、複雑な人だよ、いろんな意味で。僕にもあいつの性格は把握し切れない。」

僕の言葉に彼女は少し、表情を和らげた。

「あたしを好きだって言つてくれたのはコウさんの方なんですよね？」

「そうだよ。あいつは君のことが好きなんだ。だから、理由はありますに聞いて欲しい。できればあいつを受け入れてやつて欲しいんだ。」

「

僕は前方を見ながら、車線変更する。

彼女を正視できなかつた。

この台詞を口にしている今、僕は恋敵に優を譲り渡しているんだから。

「・・・理由つて何ですか?どうして、そんなややこしい事したの？」

彼女は俯いて考え込む。

今、僕の口からは言えない。

自分は女ですって、優が言わなきゃ意味がない。

どうせなら、言った瞬間に玉砕して欲しい。

すぐに僕が慰めてあげれるように。

二人が始める前から、終わることを僕はショミレーションしていた。

「ね、美咲ちゃん。優は少し変った人だけど、本当に寂しがりなんだ。アイツ、今、美咲ちゃんに捧げるベタベタラブソング作ってるよ。できたら、ピアノでイントロ弾いて欲しいんだって、言ってた。

「

優の伝言を伝えると、彼女は顔を上げて嬉しそうに微笑んだ。

アパートの駐車場にスカイラインを止めて、僕は彼女をアパートに招いた。

ボロアパートの鉄筋非常階段を2階に登つた一番奥が僕らの部屋だ。彼女はキヨロキヨロしながら、僕の後ろをトコトコ付いて来る。太陽の沈み始めた西日がより強くなっていた。

時計を見ると、もう5時になつている。

優は部屋で待つてんのかな？

考えながらアパートのドアを触ると、鍵はかかっていなかつた。軽くノックして僕はドアを開く。

「ただいま、優、いるか？」

狭い玄関で優を呼ぶと、襖が開く音がした。

バタバタ音を立てて、ギターを肩からぶら下げたまま、優が駆け寄つて來た。

「あの、優・・・」

言いかけた僕の前に、優は両手をバッと出してバタバタ振つた。

「言つた！聞きたくない！どうせ、ダメだつたんだろ？考えたら、区別なんて付く訳ないじゃないか。こんなのデキースだ。でも、いいよ。もう、この際何でもやつてやる。俺流にやつてみろよ。ナンならスカートだつてTバックだつて履いてやるよ。お前の好きなよつこすればいい！」

「バカ……！何言つてんだよ。」

僕は、興奮して勝手にペラペラ話しう出す優に飛び掛つて、慌てて口を塞いだ。

彼女に聞かれたら大変だ。

もうこれ以上、話をややこしくしたくない。

口を塞がれたまま、優は切れ長の目を見開いた。

「心配するな。僕の負けだ。美咲ちゃんはちゃんとお前を見てたよ。今、連れてきたから、後はお前が告白しろ。いいな。」

「連れてきたって、どこで……。」

その時、玄関のドアの隙間からヒヨシ「リ顔を出した彼女に気が付いて、優は絶句する。

全く同じ顔の僕たちが並んでるのを見て、彼女も驚愕の表情を浮かべた。

ドッペルゲンガー現象を見てしまったかのような顔だ。

優と美咲ちゃんはお互いの顔を見つめたまま、じばらく硬直していった。

やがて、美咲ちゃんがおずおずと口を開く。

「あの、本物のコウさんですか？」

彼女の問いかに、優は小さな声で答えた。

「そう。俺が優です……。ごめん。」

その言葉に、彼女はこぼれる様な微笑みを浮かべた。

僕の仕事はここで終わりだ。

後は、優が自分でカミングアウトしてから告白する。

その後は、神のみぞ知ることになるだろうけど。

「僕は、レンタカー返しに行つてくるから。ほら、『一ヒー』でも出してやつて、二人で話しろよ。帰りはお前が送つてやれよ。」  
まだ、固まっている優の肩を僕はポンと叩いた。

優は泣きそうな顔になつて僕の顔を見る。

「ま、待てよ。一人きりになるのか？」

「そーだよ！ これ以上、僕はタッチしない。僕の気持ちも考慮しよう。」

置いていかれる子供のような情けない顔で、優は僕を見つめる。  
でも、これ以上、僕が干渉できることはない。

僕は一人を残して、アパートを出た。

さつきの駐車場に戻つて、スカイラインにエンジンをかける。

これから、どんな話し合いがされるのか。  
彼女は優の全てを受け入れてくれるのか。

結果、優は僕から離れていくかもしれない。  
辛くないと言つたら嘘になる。

でも、見た限り、美咲ちゃんは本当にいい子で、不安定な優もしつ

かりした彼女になら甘えることができるんじゃないかなと、少し期待した。

僕は結局、アイツの兄であり、あいつが幸せになるのが一番の望みなんだ。

僕がその相手でないことは、悲しかつたけど。

僕は狂つてる。

自覚はあつたし、それでも構わなかつた。  
もし、優を愛してくれる人が現われなかつたら、僕は一生狂つたままアイツに付き合つていく。

・・・そのつもりだつたんだけどな。

どうやら、役不足だつたみたいだ。

目頭が熱くなつて、僕は目をゴシゴシ擦つた。

返す前に、この車で高速道路ブツ飛ばすか。

僕はクラッチを踏み込んで、ギアを握りしめた。

## 24話（後書き）

ここまで読んで頂いた方々、お疲れ様です。

明日から、第6章に入ります。

そろそろG色を強めていきますので、ご期待くださいませ。

（ \* ^ ）

バタン、とあたしの後ろでドアが閉められる音がした。本物のユウさんと向かい合つて立つたまま、あたしはその場に取り残されてしまった。

どうして気が付かなかつたんだろう。

今、目の前に立つてゐるユウさんは、わざまでいたお兄さんとは明らかに別人だつた。

同じ構造の顔だけど、目つきや表情が違う。

警戒している野生動物みたいな、鋭いけど、怯えたような瞳。

ホンワカした雰囲気のお兄さんに比べて、ユウさんは刃物みたいな鋭利な緊張感をあたしに与える。

・・・怖い。

正直、そう思つた。

ユウさんは髪をかきあげて、グシャグシャ搔き混ぜた。

置いてかれた野良ネコみたいなあたしの処分に、困つてゐるみたいだ。

「あの、良かつたら、入つて。こんなとこじゃナンだし。」

少し顔を赤くして、ぶつきりぼうに彼は言つた。

初めてちゃんと聞いたその声は、まだ少年みたいな高いキレのある声だった。

あたしは言われるままに、サンダルを脱いで部屋に上がった。

彼に誘導されるまま、玄関に直結しているキッチン兼リビングの小さなテーブルの席につく。

大学が斡旋したような、学生用のアパートに違いない。  
お世辞にも、オシャレな部屋とは言い難かつた。

キヨロキヨロ部屋の中を観察しているあたしの前に、コウさんは缶ビールをドン、と置いた。

「「めん、これしかない。あとは水道の水。コーヒーは作り方が分からぬ。」

「あ、水道の水でいいです。」

ビールなんてお店でしか飲んだ事ないあたしは、丁重にお断りした。あたしの答えに、コウさんはまたキッチンに戻ると、マグカップに水道の水を入れて持つてきた。  
殺伐とした人だ。

あたしは、可笑しくなった。

コウさんは小さなテーブルを挟んだあたしの向かいの席につく。  
鋭い切れ長の瞳が、睨むようにあたしを見つめる。

中性的な綺麗な顔だ。

それは間違いない、あたしがライブで見たギタリストだった。

「あの、コウさん・・・」

「優でいいよ。みんなそう呼ぶから。さつきのは双子の兄の良。あいつは、ややこしい事をしたのは俺だ。謝るよ。」

あたしは彼の顔を見つめた。

「ライブにいたのはあなた?」

「そう。その後、あんたと電話で話したのは良。」

「映画に行ったのは?」

「あれも良。その後、トイレで会ったのは俺。でも、あんたが引っ

叩いたのは良。」

「朝、部室で会ったのは?」

「あれは俺。喋らない方が俺だよ。」

あたしは一連の顛末を思い出しながら、必死で頭を整理した。眉間にしわ寄せて頭を抱えるあたしを、優さんは可笑しそうに見つめている。

あ、少し笑った。

中性的な美形が、女人みたいに柔らかい表情になつて、あたしは胸がどきどきした。

「じゃ、あたしのこと好きだって言つてくれたのは?」

あたしは顔が火照つてくるのを感じながら、優さんを直視した。優さんは、眩しそうに少し視線を泳がせる。

彼も照れてるのがよく分かつた。

「アレは、俺。」

「じゃ、あの時、キスしてくれたのは・・・?」

畳み掛けるあたしに、優さんは完全に赤面して髪をかきあげた。

「それも俺。気に入らなかつたら謝るよ。『ごめん。』

あたし達はお互い赤面したまま、沈黙した。

「あたし……あの時、嬉しかつたです。」

あたしは何とかそれだけ言つた。

優さんは無言のまま、あたしの顔を見つめている。

そして、彼の左手があたしの頬に伸ばされた。

ザラつとした荒れた指の感触が、触れられた頬に感じられる。

ああ、これだ。

あたしが覚えていた、優さんの感触。

あたしは頬に当たられた左手を取つて、握り締めた。

「美咲……って呼んでいいのかな？」

「は、はい。みんな、そう呼んでます。」

「じゃあ、美咲。俺、あんたに話さなきやなんないことがある。」

再び、あたしの頬に手を添えて、優さんは顔を近付けた。きれいな顔が至近距離に迫つてきて、あたしは動搖を隠せない。どきどきも最高潮だ。

「な、何ですか？話つて……。」

分かりやすいくらい期待しているあたしを見て、彼は笑つて言つた。

「あのせ、同性愛つてどう思つ？？」

「……は？」

このやり取り、前にもあつたよつな……。

何で、いつもこの話をしたがるのか、あたしには分からない。

露骨に嫌な顔をしたあたしの顔を、優さんはそつとなでた。

左手の指先がザラつと頬に触れる。

話すのを躊躇するかのように、優さんは口を開いてから、唇を噛み

締めた。

「・・・あの、何で、いつもその話になっちゃうのか、意味が分かりません。どうして同性愛に拘るんですか?」

「素朴な疑問だな、確かに。」

真剣に問いかけるあたしの言葉に、優さんは苦笑した。

そしてあたしを真っ直ぐに見つめ直す。

切れ長の目が優しく細められて、あたしはその笑みに鼓動が速くなる。

その柔らかな微笑みのまま、彼は言った。

「・・・俺が、あんたと同じ女だつて言つたら信じる?」

あたしは、真面目な顔をしたまま硬直していた。  
言われた意味がよく分からなかつたからだ。

目の前にいる初恋の王子様が、あたしと同じ女つてことは、いくら何でもおかしい。

あたしの無反応ぶりを見て、彼は困った顔で髪をクシャクシャと搔き混ぜる。

「意味、分かつたかな？俺、女なんだよ。あんたと同じ。」

女人？

あたしと同じつて言われたつて、どこが同じなんだろう。  
同じよつて見えるといひませ、全く見当たらぬ。

「あの、あたしには女人には見えませんけど。」

真面目に答えるあたしを見て、彼はハハハと高らかに笑つた。  
そう言われば、笑顔は女性的な氣もする。  
あたしは必死で、他の女性らしい所を探した。

「女に見えなくて光栄だけど、本当にそつなんだ。どうしたら信じてもらえる？見せようか？」

「はー？」

「み、見せるつて、なにをー？」

笑いながら立ち上がる優さんを、あたしは必死で引き止めた。

「ちょ、ちょっと待つて下さいーな、何で？女人なのに、一人称が俺なんですか？」

あたしにすがりつかれた優さんは、何とか椅子に座り直した。あたしの問いかけに、首を少し傾げる。

「・・・分かんない。子供の頃から気が付いたら俺って言つてた。男とばかり遊んでたからかな。」

「じゃ、何で男の子のカッコしてるんですか？」

「・・・別に？Tシャツとジーンズが好きなんだ。」

「な、何で・・・なんで、あたしの事、好きだつて言つたの・・・？」

最後の問いに、彼は真面目な顔になつた。

テーブルに向かい合つたあたしの手を取つて、ギュッと握り締める。切ない悲しそうなその表情に、あたしの胸はまたドキドキした。

「ライブの時、あんたが俺の事見てて、すごく気になつてた。次に会つたら絶対話しようと思つて、一日目は電話番号書いたピックを用意しておいたんだ。また会えて俺、嬉しかつた。」

彼の真剣な眼差しにあたしのドキドキは、どんどん加速していく。こんなにかつてないのに、男の子じゃないなんてどういう事？

「で、でも、女人なのに、女の子が好きなんですか？優さんってそういう人なの？」

「そういう人って言われたら、こういう人だつて言うしかないんだけど。俺は女の子しか好きにならないんだ。でも、好きになる対象が女の子だけで、俺は自分が変だとは思つていない。あんたは？」

「あ、あたし？」

「俺が女じや、マズイ?」このままの俺じやダメかな?  
「ま、待つて下さい……！」

何で?

そういう問題の前に、何か問題あるんじゃない?

女の子同士つて、そんなの特別な人達でしょ?

あたしは、今まで平凡で地味な人間だったし、そんな規格外のお友達なんていなかつた。

あたしは、ただ、カツコいいギタリストの彼が好きになつちやつただけなのに。

どうしてこんな事になつちやうんだろう?

「あ、あたし、分かりません。今までそんな人と会つた事もないし、経験もないし。今まで地味で彼氏もいなかつたのに、突然こんな……。それに、まだ、優さんが女だつて、実感湧かないです……。」

あたしの煮え切らない態度に、優さんは少しイラ立つた表情になつた。

再び椅子から立ち上がると、あたしの腕をいきなり引っ張り上げた。急に引き寄せられたあたしは、そのままの勢いで優さんの胸に抱き締められる。

至近距離に彼の顔があつて、あたしは硬直したまま動けなくなつた。

「……優さん?」

ドキドキしながら問い合わせるあたしを抱き締めたまま、彼は信じられない行動に出た。

引っ張り上げたあたしの左手を、自分のTシャツの中に下から突っ込んだのだ。

「……な、何するんですか!?」

「信じられないんだろ？手つ取り早いから触つてみろよ。一応、少しはあるから……。」

彼の手に掴まれたあたしの掌は、想像以上に柔らかなその胸に押し当てられた。

確かにそれは、あたしもよく知つている感触だ。

その胸から鼓動がすごい速さで、掌に跳ね返つてくる。

「分かつただろ？俺は女だ。でも、あんたのことが好きなんだ。俺のこと気持ち悪くなかったら、付き合つて欲しい。俺は……。」

彼の顔が近づき、あたしの脣に、彼の脣が触れる。

きやあああ……！

もうダメ……。

その時、あたしのドキドキも最高潮の域を完全に超えた。

あたしはそのまま、目の前が真つ白になつて、足元から崩れ落ちた。

目を覚ましたあたしは、ベッドの上に寝かされていた。

朦朧とする記憶を手繕り寄せようと、あたしは目だけ動かして周りを観察する。

その視界に入つたきれいな横顔。

あたしは、全てを思い出してガバッと起き上がつた。

傍らに頬杖をついていた優さんは、突然、飛び上がつたあたしに少し驚いて後ずさる。

心配そうに首を傾げてあたしを見た後、表情を和らげた。

「良かつた、気が付いて。あんまり起きなかつたら救急車呼ばうかって考えてたんだ。大丈夫？」

もちろん、大丈夫だつた。

あたしは首だけブンブン振つて、元気をアピールした。やつとホツとした顔になつて、優さんは笑みを見せる。

どうか、この人は女人なんだつけ。

初めからそのつもりで見ると、今度は女性に見えるから不思議だ。先入観つて恐ろしい。

あたしが勝手に男だつて思い込んでただけで、彼は最初から女だつたんだ。

でも、それが彼をキレイになる理由に成り得るだろうか？  
誤解を与える風貌ではあるけれど、それは彼に責任はない。  
いや、彼女か。

優さんはベッドに座っているあたしに近づき、頬に手を伸ばした。その手がそつと首筋に下りてゆき、あたしの首の後ろに回される。それでから、最後にフられるのは何度されても辛い。俺のこと、ダメだつたらもうハッキリ言つて欲しい。受け入れがたい人が大多数なのは分かってる。ダメでも今なら、俺はどうも思わない。でも、もし俺のことが少しでも好きだつたら、付き合つて欲しい。普通の恋人みたいに。」

「びっくりさせて、ゴメン。でも、俺は早く返事が欲しいんだ。焦らされても、最後にフられるのは何度されても辛い。俺のこと、ダメだつたらもうハッキリ言つて欲しい。受け入れがたい人が大多数なのは分かってる。ダメでも今なら、俺はどうも思わない。でも、もし俺のことが少しでも好きだつたら、付き合つて欲しい。普通の恋人みたいに。」

「あ、あたしでいいんでしょうか？あたしは普通の女の子ですけど。」

「オズオズとあたしは返事をする。  
」

その答えにまた彼は笑つた。

「俺も普通だよ。普通の恋人みたいに付き合いたいんだ。これでも、好きな女の子のために弾き語りするのが夢なんだ。」

そう言つてゐる間に、あたしは抱き寄せられた。

女人とは思えない、骨ばつた強い腕があたしの首を支える。

「美咲、俺にチャンスをくれないか？俺はあんたに自分で作ったベタベタバーラードを弾き語つて、ピアノで伴奏して欲しい。そういう普通の恋人になつて欲しいんだ。俺は普通だから。美咲のこと好きじゃダメかな？」

彼の切ない訴えをあたしは黙つて受け止めていた。

でも、その間にも彼の腕はあたしを抱き寄せ、唇はあたしの首筋を這つてゐる。

くすぐつたくて、あたしは彼の頭を両腕で抱きしめた。柔らかい、くせのある髪の感触が気持ちいい。

じゃれてくる長毛の犬みたいだ。

「優さん、あたしまだ返事してないんですけど・・・。

「・・・せつかちなんだ。嫌ならやめるけど?」

「・・・いえ。」

あたしは、彼の頭をギュッと抱きしめる。

女人の人だつて分かつても、この人はユウさんだつた。  
最初に見た時の、クールで熱いギタリスト。

あたしは、この人にこうされるのをすぐ待ち望んでいた。

子犬がじゃれるような愛撫の後、彼の舌があたしの唇を割つて入つてきた。

呼吸ができなくなるくらいの乱暴なキス。

無意識によけたあたしの顔を、彼の手がまた捕らえる。

あたし達は激しくなる呼吸のまま、お互いの顔を見つめた。

「・・・ユウさん。」

「優つて呼んで。俺だけ見て。俺と一緒にいて・・・！頼むから・・・。

最後の方は懇願だつた。

全身全霊をかけた願いだつた。

この人は今までどんなに寂しい思いをしてきたんだろう。  
あたしはこの人を受け止めることができるのだろうか。

そんな思いが頭をよぎつた。

チャンスをくれつて言つたつて、もし、あたしの手に負えない人だつたら?

あたしは、女の子同士で愛し合える人なんだろうか?

答えが出ない。

全てがあまりにも唐突過ぎた。

簡単に返事をしてから、この人を傷つけたくない。

あたしは、尚も体を押し付けてくる優さんをグッと腕で押し返した。

「・・・美咲？」

あからさまな落胆と絶望の表情。

この人を悲しませたくないのに・・・。

でも、あたしは言つしかなかつた。

「『みんなさい・・・！少し考えさせて。時間を下さい・・・。』

## 27話（後書き）

ここまで読んで下せつた方々、お疲れ様です。  
明日から最終章です。  
もう少しあ付き合いで下さこね。

またフ separate。

俺は今度こそ、立ち直る気力がなくなつた。

「時間を下さい・・・。」

彼女はそういつた後、俺の腕をすり抜け、アパートを出て行つた。カンカンカン・・・と、鉄筋の階段を下りていく足音がだんだん小さくなつて、部屋は再び静寂になつた。

分かつてたじやないか。

俺を愛してくれる人は、この世にはいないんだつて。こんなのいつものことだ。

ちょっとだけ期待しちやつたのは、彼女が別人だつて見抜いたから、もしかして俺の本質を見てくれたのかと思ったからだ。でも、勘のいい人だつたらすぐに気が付いただけの話だ。

分かつてたのに、涙が止まらなかつた。

今度こそつて思つた期待の反動がデカ過ぎた。

そして彼女の小さな柔らかい体の感触。

抱きしめた俺の腕にまだ温かみが残つてゐた。今頃になつてはつきり分かつた。

俺はいつの間にか、本当に彼女のことが好きになつていたんだ。

さつきまで彼女が横になつてたベッドに俺は倒れ込んだ。

くっそお・・・。

こんな姿、良には見られたくない。

でも、賭けには勝つことになるのかな。  
もうどうでもいい。

あいつがヤリたいつていうなら、好きにさせてやる。  
俺はもう全てがどうでも良くなつてた。

髪を触られる感触に気付いて、俺は目を覚ました。

いつの間にか真っ暗になつた部屋に差し込む月明かりに、俺の片割  
れが影みたいに照らされて俺の傍らに座つている。

見れば見る程、俺そつくりで気持ち悪い。

良は、黙つて俺の髪をただ、なでていた。

ベッドで一人で泣き寝入りしてた俺を見れば、状況は一目瞭然だつ  
ただろう。

チクショー・・・。

カツコ悪。

俺は舌打ちして、良の手を軽く叩いた。

「いいよ、慰めなくて。慣れてるから。」

「・・・仕方ないよ。やっぱり普通の女の子には受け入れがたいの  
かもね。でも、優には僕がいるじやん。」

「・・・るつせえ！お前じゃダメなんだよ。」「贅沢言つなよ。もう妥協しろ。」

良は体を屈めて、俺の顔を探す。

うつ伏せで寝ていた体を仰向けにひっくり返すと、涙で濡れた俺の両腕を開いて押さえつけた。

月明かりに照らされた良の顔が、優しく微笑む。俺が言うのもなんだけど、綺麗な顔だ。

優しい良の微笑みは、女神みたいに慈悲深い。

「僕は賭けに負けたんだけど、この結果はどう思つ？」「・・・想定内だよ。こつなると思つた。」

良の掌は、仰向けに寝かされた俺の腹の上にピタリと当たられた。その手が少しづつ移動して、俺の左の胸の上で止まる。勝手に早くなる俺の鼓動を、良は楽しんで感じているに違いない。

「良、好きにしろよ。勝ったのか負けたのかよく分かんないけど、お前には迷惑かけた。これでも感謝してるよ。スカート持つてきたか？」

俺がそう言つと、良は黙つて首を振つて、笑つた。

「僕はお前が嫌な事はしないよ。お前が僕にされたいつて言つながら別だけど。たまには女の子みたいにされてみる？」

「・・・遠慮するよ。後戻りできなくなりそうだ。」

俺の答えに、左胸に当たられた良の手に力が入つた。敏感な部分を驚掴みにされて、俺は顔をしかめる。

「・・・痛いよ。離せ。」

「戻れるなら、女の子になれよ。本当はぜひしたい?」

俺は良の手首を掴んで振り払った。

「何度も言わすな。お前には分からないだろ?けど、俺は最初からこうなんだ。それに・・・俺はあの子が好きなんだよ。」

「じゃあ、今まで通りお前は男でいろよ。スカートは僕が履くから。」

「

良の提案に俺は思わず吹き出す。

ほつといたら、この兄は本当にやってしまいそうだ。

「お前つて本当に狂ってるんだな。ばつかじやねえの?」

「そう思われても構わないよ。お前の傍にいられるなら。」

150

顔を寄せてきた良を俺は受け入れた。

そつと唇が触れて、良は鳥が啄ばむ様なキスをする。その優しい感触は、傷ついた俺の心に染み入った。目頭が熱くなつて、涙がぽろぽろ溢れ出す。

良は、舌でその涙を舐め取つていく。

「お前のこと好きになれたら楽だらうな。」

「だから、僕で我慢しろつて。」

俺はこの病んでる兄の胸に顔を押し付けて、子供の頃みたいに泣き出した。

いつもの朝がきた。

コーヒーの香りで俺は目を覚ます。

台所で朝食の支度をしている良の後姿を俺はボンヤリ眺めた。

確かにスカートが似合いそうだ。

俺達が双子の姉妹だつたらイケたかも・・・。

恐ろしい妄想が俺の頭を掠めて、俺は身震いした。

狂つてるのは一人だけで充分だ。

シャワーを浴びて席についた俺に、良はできたてのベーコンエッグを持つてくる。

片手にトレーを載せて、器用にテーブルに並べていく様子は新妻みたいだ。

「ねえ、優。もうすぐ夏休みだけど、どうする？実家に帰る？」

コーヒーを受け取りながら、俺はその言葉に首を傾げた。

そうだ。

来週から夏休みが始まる。

だけど、俺はその前にイベントがある。

多分、夏休みが始まる前の土曜日の夜だ。

俺は壁に貼つてあつたカレンダーに目を走らせた。

「ごめん、良。俺、ライブがある。同じメンバーで、同じ場所で。」

「ええー！またやるの？」

俺の言葉に良は嫌な顔をした。

今回の件がよつぱんじトラウマになつたに違いない。

「この前のは夜店ライブ。今度は商店街主催の盆踊りライブだ。それが終わつたら、帰るよ。」

「・・・何、そのローカルイベントのオンパレード。夜店の次は盆踊りかよ。」

俺も実は少しゲンナリしてはいた。

ドラムのショータ先輩のお父さんが商店街の会長で、先日のライブでビールがバカ売れしたのに味をしめて、もつ一度やつて欲しいと要請があつたのだ。

そもそも、ショータ先輩の実家が商店街の中にある酒屋なんだから、ビールが出れば嬉しいに決まつて。バブルが弾けてから不景気だし。

ショータ先輩も自分の学費を捻出するのに必死だ。

そうだ。

その時、また美咲に会えるかもしれない・・・。

突然、俺は思い出して、少し元気が出た。

俺の分かりやすい表情を見つめて、良は溜息をつく。

「優、美咲ちゃんにまたチャレンジするとか言つなよ。懲りただろ？」

「そんなことしないよ、今更・・・。」「

良の言葉に俺は動搖する。

でも、俺はまだ懲りてなかつた。

襖を開けて、俺は自分の部屋に入った。

自分の部屋に置きつ放しだった昨日作った曲が書いてあるノートをパラパラ捲る。

俺はギターをソフトケースに突っ込んで背中にリュックサックみたいに背負つた。

「良、俺、先行くよ。軽音部でやることがある。」

良の返事も待たずに、俺はカバンを掴んでアパートを飛び出した。

大学の1講田は9時スタートだ。

俺はそれを上回る8時に軽音部の部室に到着した。

誰もいない部室は、朝日を浴びてすゞに熱気が部屋に充満している。俺は窓を次々開け放つた。

ギターをケースから引っ張り出して、プラグを繋ぐ。性能の良くない古いアンプから歪んだ音が出た。

大まかにアウトラインのできていた曲に、ソロの部分を書き込む。ここは圭介さんに弾いてもらわなければならないからだ。弦を弾き、汗をかきながら音をとつていく。

その時、バタン、とドアが開く音がした。

振り向くと、そこには今思い出していた圭介さんが立っていた。

「あれ? ユウ、最近早いじゃん? 何してんの?」

いつもの端正な顔で爽やかに笑う。

あんたこそ、早いよ。  
まだきてないのに。

俺の怪訝そうな顔を見て、圭介さんは両手を上げてウインクした。相変わらず、外国かぶれしたキザな癖だ。

「怒るなよ。秘密なら誰にも言わないから。オレは荷物を置きにき

ただけだ。お前は「」で何やつてんだ?「

俺は渋々、書きかけのノートを見せた。

確かに、実際に弾く人に見てもらつたほうが早い。

「何、これ?お前が書いたの?」

「わづ。今度の盆踊りライブで演奏したいんだ。」

「えーと言ひながら圭介さんは、歌を口ずれる。

俺はドキドキして、彼の表情を観察した。

「なあ、すういベタな歌詞だな。オレ好みだけ?」

圭介さんは笑つた。

俺は慌てて、ノートを剥ぎ取つた。

「」の歌だけは、圭介さんにギターせつて欲しいんだ。伴奏とソロパート、いい?」

圭介さんは笑みを浮かべたままキョトンとする。

「いいけど、お前ギターやらないの?」

「俺はエレア口、やんدهボーカル。」

「お前が歌うの?」

「わづ。いいだろ?」の曲だけ。」

あははと圭介さんは笑つた。

「・・・何が可笑しいんですか?」

「だつて、お前が喋つたのもあんまり聞いたことないの」。どんな声で歌うのか楽しみだと思つてや。」

圭介さんは悪戯っぽい顔で俺を見てから、俺の頭をクシャツとなでた。

そうだ。

自分の声がキレイな俺は必要最低限しか人と話したことがないのだ。  
歌うつてことは、俺が女だつてバレちまう。

その覚悟も必要だつてことだつた。

圭介さんは悪戯っぽい顔で俺を見てから、俺の頭をクシャツとなでた。

「いいじゃん、俺がギターやるよ。かつ」「よべアレンジしてやる。  
お前、女できたの？」

勘のいい彼の言葉に俺は返答に困つて黙り込んだ。

その沈黙が答えみたいなものだ。

彼も意味深な笑みを浮かべたまま、それ以上は追求しなかつた。

「・・・ライブが終わつたら分かりますよ。圭介さんもびっくりしないで下さい。」

俺は頭をペコリと上げて、部屋を飛び出した。

気もそぞろに一日の講義が終了した。

俺は、ギターのケースを背負つたまま、今度は合唱部が練習をしている音楽室に向つた。  
言つまでも無い。  
美咲に会つ為だ。

音楽室は構内の中にある、学部と関係ない俺は初めて足を踏み入れる場所だった。

階段を登つて、踊り場まで来ると、アアアアアア～といつ定番の発声練習が聞こえてきた。

その声の伴奏はピアノの音だ。

美咲はそこにいるに違いない。

俺は一段飛びで階段を駆け上がった。

音楽室の前まで来て、俺はなるべく音を立てないようにそっと、アを開ける。

・・・つもりだったんだけど、老朽化している建物のドアはギイイイと歯にくる音を立てた。

さっきのアアアアア～の声が突然、止んだ。

俺がドアから顔を出しているのを、ピアノの前に並んだ20人くらいの女子大生達が一斉に振り返る。

「あ、軽音の「じやない？」

「この前の夜店でギター弾いてた」「！」

「コウ君だよ、コウ君！」

「やだい、何しに来たの？」

キヤピキヤピした声で女の子達はざわめいた。

残念ながら、俺はその女の子達には興味がなかつた。

ただ、一点を俺は見つめていた。

並んだ女子達の前に置かれたグランドピアノ。

そこに、小さな美咲が人形みたいにチョコンと座つている。

俺がいることに気が付いた筈だ。

でも、美咲は顔を上げようとはしなかつた。

顔を赤くしたまま、俯いてピアノの陰に隠れるように小さくなつて

いる。

俺はそれを無理強いして、振り向かせたくはなかった。

その反応は俺の胸にはイタかつたけど、そこは理性で耐えた。

「ちょっと、あんた！いつも部室で騒音立てる男でしょ？」「何の用なの？」

気が付くと、俺の前に小太りしたおかっぱ頭の女の子が立ち塞がっている。

俺が部室で弾いてると、「やかましい！」って怒鳴り込んでくる合唱部部長だ。

ウザイ奴が来ちました。

俺は顔をしかめて舌打ちする。

「あ、ああ。久しぶりだね。部長さん、だっけ？」

「練習の邪魔よ！用件を言いなさいよ。」

お前に用はねえんだよ！

喉まで出かかった言葉を、俺は何とか飲み込んで笑顔を作った。

「フライヤー持つて来ました。夏休み前日の土曜の夜、地元商店街の盆踊りでライブします！場所は夜店ライブと同じ商店街裏の公園。帰省する前には是非、盛り上がり下さい！」

ショータさんのお父さんが大量に印刷した商店街の広告を、俺は最高の笑顔でかわいくない部長に渡す。

渡すついでに、部長の手をそつと握つてやると、完全に俺を男だと思つてゐる彼女は真つ赤になつて印刷物を奪い取つた。

「よ、用件は分かりました。つまり、ライブの宣伝に来たつてこと？」

「そうです。良かつたら部長も来てよ。圭介さんはアンタのために歌うつて言つてたよ。」

「…………え！」

俺はテキトーな事を言つて、ピアノの向いの彼女を見つめた。  
俺を見ていたらしく彼女は、田が合つと慌てて下を向いた。

用件は分かつただろう。

美咲、俺はあなたの為に歌うから。

思いが通じるように、俺は彼女をひたすら見つめていた。

前期試験も終わり、ライブを明日に控えた俺達は軽音部の部室に集まって最後の音合わせをしていた。

この時期になると授業がないヤツはさつさと里帰りしてしまつ。学生が多いこの街はゴーストタウン化するのだ。

かく言う俺も、このライブが終わったら必ず一緒に実家に帰ることになつていた。

たまに帰ると、親は初日は手厚くもてなしてくれる。だけど、だんだん扱いが粗末になり、こき使われ始めて、一週間後にはケンカしてまた下宿に戻るのがお決まりのパターンだった。実家と言つても、隣の愛知県の北部だから東名高速で帰れば2時間くらいのもんだ。

そういうえば美咲はどこから来てるんだろう。もしかして帰省していないだろ？

基本的なことを俺は今更思い出した。でも、部室まで宣伝に行つたんだ。もし彼女がライブに現われなかつたら、俺はそれを答へと受け止めるしかない。

「じゃあ、コウが今回ボーカルやるつづ曲、やつてみる？」

圭介さんの声に俺はハッと我に返る。彼はピックを口に咥えて、チューニングしながら俺を見てワインクした。

本当は本番まで歌いたくなかったんだけど、会わせておかないといけない。

仕方なく、俺は立ち上がった。

「お前、歌えんの？」

ベースの先輩が心底驚いた顔をして、俺を見る。

歌えるや。

少なくとも、高音は小野正利より出る。  
女なんだから。

俺のエレアコで入るインターロ。

ここは本当は美咲のピアノで弾いて欲しかった。

俺は、ベタな歌詞を歌い始める。

その途端に、メンバーの表情が変った。

何とか途切れないように演奏は続いているものの驚愕の表情で歌っている俺を見ている。

面白いほど分かりやすいメンバーのリアクションに、俺は苦笑する。

歌つたらこうなるのは想定内だった。

歌う時の俺の声は実は高い。

それも、完全に女声ソプラノ。

それが嫌で、なるべく人と話す時は低い声を出すようにしていたんだ。

約束通りの圭介さんアレンジの感動的なソロギターが入った後、最後にサビを歌つて曲は終わった。

一同、シーンとなつて俺を囲む。

やがて、圭介さんが禁忌を犯すかのよつた緊張した面持ちで口を開いた。

「・・・お前つて、もしかして女?」

返事の代わりに、俺はニヤつとこつもの悪そうな顔をして見せた。

一通りの打ち合わせをしてから、俺はアパートに帰った。  
街はすっかり暗くなつて、熱い空気が立ち込めている。  
また熱帯夜だ。

アパートの前に見覚えのない車が止まつてゐるのに俺は気が付いた。  
ワインレッドのスカイライン。

ヤンキーが乗るようなタイプのだ。

そのドアが突然中から開いて、良が低い車体から体を屈めて出でてきた。

「おかえり。明日、ライブが終わつたら小牧に帰るだろ?車、レンタしてきた。」

「・・・それがスカイラインかよ。何だよ、このヤンキーみたいなの。」

そつなんだ。

軟弱な見かけによらず、こいつは意外に車好きで暴走族だった。

俺から言わすと、趣味の悪いヤンキー仕様車ばかり乗りたがる。

「いいじゃん。どうせ同じお金出して借りるならカッコいい方がいいだろ？向こうの一ツサンレンタカーでそのまま返せるし。」

「これがカッコイイと思つてんのか？電車で帰ればいいだろ、もつたひない。」

俺の言葉に良は不機嫌そうに反論する。

「お前の荷物持つのはもつ嫌なんだ。自分で持つたことないクセに。もつたひないのは僕の体力だよ。」

ブツブツ言つてる良に、俺はフライヤーとは名ばかりの、商店街の広告を渡す。

良はキヨトンとしてそれを受け取り、田を走らせるどゲンナリした顔になつた。

「これが盆踊りライブのチラシのこと？」

「やつ。お前も来いよ。今回、俺も歌つから。」

俺の言葉に良は青くなつた。

「お前が歌うの？歌つたらさすがにバレると思つけど、ここのか？」「いい。何か、隠れて生きていくのにも疲れた。俺のカミングアウトと引き換えにバラード歌つて、彼女が応えてくれなかつたら諦めるよ。」

「・・・諦めてなかつたんだね。」

良は溜息をつきながらも、笑みを見せた。

「いいじゃん、お前がやりたいよつやれよ。最終的には僕がいるから、安心してフラれていよい。お前が男でも、女でも、僕はお前の味方だからさ。でも、一応、応援してるよ。」

俺は良の優しい答えに少し感動した。

本当に、こいつを好きになれたらどんなに楽だらう。

「じゃ、見に来てくれる?」

「行くよ。頑張れよ、優。」

俺と同じ顔で、良は無邪氣に笑った。

僕が洗濯物を片付け出す頃、優はギター・ケースを抱えて出て行った。  
こんな場面、以前もあったな。

デジャブーみたいだ。

考えたら、夜店ライブから1月も経っていないんだ。

僕は時計を見ながら、畳んだ洗濯物を大きめバッグに詰め込んでいく。

ライブでまだ少し時間があった。

バッグに詰めているのは、明日からの里帰りの準備だ。

僕はライブが終わったら、その足で実家に優を連れて帰るつもりでいた。

彼女は来ないんじゃないかと、実は僕は思っていた。

優は普通じゃないから分からぬうけど、一般の人気が同性愛を受け入れるのはやっぱり難しい。

ダメなものはダメなんだ。

理屈じゃなくて。

例えば、僕が男を愛せるかと聞かれたら、返事は速攻でノーだ。  
どんなにいいヤツでも、男が相手じゃ無理なんだ。

彼女はただ、ノーマルだったんだ。

それ以上でも、それ以下でもない。

悪気はないし、彼女に非もない。  
優には気の毒だけど。

駐車場のスカイラインの狭いトランクに、帰省の荷物を押し込み、僕は時計を見た。

現在、時刻は6時。

ライブが始まるのは確か7時だから、まだ余裕がある。

ライブ終了後は盆踊り大会に突入らしい。

その後、車で高速乗つて2時間もあれば実家だ。

そろそろ出かけて、ライブ見てから帰るか。

その時、部屋から電話の鳴る音が聞こえた。

駐車場にいた僕は、その音を聞いて慌てて階段を駆け上がり、部屋の電話に飛びつく。

「もしもし? 富崎ですが。」

「・・・良? 僕・・・。」

「あ?」

聞きなれた声がして、僕は受話器をギョットとして見つめた。

もつライブの準備してる頃だろ? て、どうから電話してるんだ?

「何だよ、どこにいる? 忘れ物でもしたのか?」

「良、俺、今日弾けない・・・。」

「あ?」

受話器から死にそうな優の声が聞こえる。  
僕はさすがに慌てて、受話器を握り直す。

「何言つてんだよ。迷惑かかるだろ? 何があつた?」

しばらく、沈黙した後に、優の涙声が聞こえた。

「今、公園に合唱部の女の子達がみんなで来てるんだ。そこに、美咲だけいなくつて……。部長の話だと、彼女、今夜、実家に帰るんだつて……。今頃、駅に向つてるだらつて……。」

僕は愕然とした。

この展開は僕も想定外だった。

ライブが始まる前から、彼女の答えが分かつちゃつたってことか……。

「優、落ち着け。」

「だつて、俺、ここにいる意味ないじゃん。もう、弾ぐのめんどくさい。彼女がいないんだから、俺がバラード歌う必要はなくなつた訳だしさ。」

自嘲的に笑う声は、泣き笑いだつた。

僕は今すぐ、優を抱き締めたかった。

そうしないと、あいつは本当に壊れてしまつ。

でもその時、ぼぐの頭に考えが浮かんだ。

「優、彼女は今夜の電車で帰るつて事か?」

「知らねえよ。ただ、駅に向つてるつて言つてた。」

「彼女の実家どこだよ?」

「知らねえつたら……。でも、関東方面じやね? 関西弁じやなかつたし……。」

僕は冷蔵庫に張つてある新幹線のダイヤを見た。

今頃駅に向つてるとしたら、東京方面の新幹線は、19:00発だ。

駅で待ち伏せすれば、会えるかもしれない。

僕は受話器に向って怒鳴った。

「優、とにかくライブは出る。僕が必ず、彼女を連れてくから。いいな！」

優の返事も待たずに、電話を切ると、僕は非常階段を駆け下りた。駐車場に荷物を積んで止まっているスカイラインの低い車内に入つて、エンジンをかけるとドオッとマフラーから爆音がした。レンタルにしてはいい音だ。

クラッチを踏み込み、ギアを入れる。

スカイラインは、すごい勢いで駐車場を飛び出した。

駅前は土曜の夕暮れ時という最悪の時間帯のため、混雑していた。せっかくのスカイラインも渋滞相手じゃ、意味が無い。無駄に排気しながら、僕は渋滞の中でイライラしていた。

駅に向つてるつていう情報、だけじゃ、会える確立は少ないだろう。でも、彼女が東京方面の新幹線に乗るつもりなら、会える場所は一箇所だけある。

新幹線の東京方面のプラットホームだ。

ダラダラと走りながら、車はやつと駅前に出た。

公共の立体駐車場に車を止めて、僕は新幹線のプラットホームに向つて走り出す。

駅の中は帰路につく人でごった返していた。

この中から美咲ちゃんを探し出すのは不可能だ。

僕は時計を見ながら、切符売り場をウロウロしていた。

既に6時半を回っている。

今すぐ、見つけたとしてもライブが始まる7時には絶対間に合いそうもない。

あいつが終盤に歌えば、何とかギリってとこか。

僕はビン底メガネを押さえて、駅の中を観察した。

その時。

奇跡は起つた。

みどりの窓口から出てきた、白いレースのワンピースに麦藁帽子の女の子が僕の視界に入った。

大きな旅行カバンの中に切符を入れようと、みどりの窓口の前で立ち止まつた彼女を見た時、僕は猛ダッシュしていた。

「美咲ちゃん！待つて！」

突然、現われた僕に彼女は幽霊でも見たような、驚きと恐れの表情をした。

息を切らせながら、これ以上逃げられないように、僕は彼女の腕を掴む。

「・・・コウさん？」

「じゃない！僕は良だ。美咲ちゃん、ライブ見に行かないのか？優は君が来るのを待ってるんだ。」

僕の問いに彼女は少し視線を泳がせる。

困っているのは一目瞭然だ。

「・・・あたし、コウさん好きです。でも、そんなに簡単に答えが出せる問題じゃないんです。あたしはコウさんに時間を下さって言つたのに、何でもかんでも、一人で決めて・・・強引よ。あたしの気持ちなんか、考えてくれないんだわ。」

彼女は悲しそうに呟いた。

そう言われば、その通りだ。

あいつは基本的に人のことをあまり考えない。でも、それは愛されたいと願うあまりに形振り構つてられなくなるからなんだ。

「・・・美咲ちゃん、でも、それが優なんだ。君は優のギターに呼ばれたつて言つたよね？その通りだ。あいつはいつも誰かを探して、自分を受け入れてくれる人を探して、愛情に飢えてるんだ。だから、お願ひだ。あいつにチャンスをあげてくれないか？その結果、ダメなら仕方が無いけど、始まる前から偏見で断わられたら、あいつが可哀相だ。」

僕の必死の懇願に彼女の顔が赤く染まった。涙で潤んできた目で僕をキッと睨みつける。

「良さんには分からないわ。あたしだってコウさんのこと好きです。でも、あたしは普通の地味な女の子で、今まで恋人なんていなかつたのに、好きになった人が女の人だつたなんて・・・良さんの言う、やつぱりダメだつた時に彼を傷つけるのが怖いの。あたしは彼の背負つてるものを全部受け止める自信がないのよ。」

僕は彼女の言いたい事が痛いほど分かった。

普通の女の子の正しい見解だろ？

でも、今日ばかりは引き下がる訳にはいかなかつた。

「美咲ちゃん、君の言い分はすゞく分かるんだけど、あいつは全然特別な人間じやない。むしろ、我儘でだらしない普通の人だ。ギターだって才能があるわけじやない、負けないよう必死で練習してたんだ。美咲ちゃんと同じ普通の人なんだよ。だから、頼む！あいつが歌うのだけ聞いてから、決めてくれないか？あいつは今、君が来るのを待つてる。」

「……あたしを待つてる？どうしてあたしなんかのこと、想つてくれるの？」

「それは、君があいつが呼んでるのに気付いたからじやないかな？君も誰かを探してたんじやないの？」

彼女は黙つて僕の顔を見た。

そして、意を決した顔で言つた。

「あたし、行きます。彼のところに連れてつて……」

### 3-1話（後書き）

いよいよで読んで下せつた方々、ありがとうございます。  
明日、最終回です。  
おつかれお付合ください。

僕と美咲ちゃんを乗せたスカイラインは、爆音を立てて駅前の大通りを走り抜けた。

さっきまでの渋滞は少し緩和されていた。

既に時刻は7時になつている。

ライブはもう始まつてゐる筈だ。

何とか、間に合つてくれよ。

僕はギアを5速に入れて車線変更を繰り返す。

美咲ちゃんは終始無言でシートベルトを握り締めていた。

「・・・聞いていいですか？」

突然の彼女の声に、僕は目だけで動かして彼女の横顔を見る。

「何？」

「良さんはどうして、そんなに必死になつてくれるの？お兄さんだからですか？」

彼女の問いに僕は黙り込む。

確かに普通の兄弟だつたら、兄がここまで介入するのは不自然だろう。

僕が優のことが好きで、肉体関係を持つてゐるつて言つたら、ドン引きだらうな。

「お兄さんだから、だよ。あいつとは生まれる前からの付き合いだからね。」

僕は無難な返事をして笑った。

確かに、恋敵を応援している自分はつまらない役柄だ。  
結果、一人になるのは僕なのにな。

でも、僕は覚悟はできていた。

マイノリティのくせに、自覚も覚悟もない優の代わりに僕はいつも  
心に誓つてたんだ。

あいつを見守る為に、僕は一人で生きていく。

あいつが一人になつた時に、いつでも傍にいられるよう。

・・・やっぱり、僕は狂つてるかな？

それでもいい。

今は、優が幸せになつてくれれば。

国道に入ったスカイランは爆音を上げて、ノロノロ走つている車を  
次々を抜き去つていった。

やがて、国道から細い道に入り、宅地を抜けるとライブ会場の公園  
が見えた。

商店街とは逆方向から来た事になる。

歩く時間がショートカットできた。

僕らは公園のガードレールに車を横付けして、公園の中に入った。  
車を降りた途端に聞こえるノリのいいロック。  
ドラムの音が腹に響いてくる。

良かつた。

取り合えず、ライブは始まっている。

今聞こえてくるギターも優が弾いてるに違いない。

奥に進むにつれて密集度を高める人の波の中を、僕は美咲ちゃんの手を引いて逆走する。

最前列まで僕らはなんとか辿りついた。

先日と同じように、盆踊りの櫓の上に彼らはいた。センターで派手なギターを見せる長身の茶髪のモテ男。

その後ろに、微動だにせずギターを弾く優が見えた。

無表情でギターを睨んでいる優は、いつもと変わらないように見えたけど、僕は折れそうなあいつの心を想つて切なくなつた。

やがて、曲が終わり茶髪男がMCを始めた。

「最後の曲です。今日はオレがボーカルの座を譲つて、ウチのギタリストのユウが心を込めて歌います。曲は My Dear」

モテ男はそう言つて後ろに下がつたが、肝心のユウが前に出て来ない。

どうやら出たくなくてゴネてるみたいだ。

モテ男とユウは何やら小さな声で口論していたが、モテ男の長い足にお尻を蹴られて、ユウは渋々前に出てきた。

マイクの前でギターを握り締めて、優は不安げな表情でぐるりと会場を見渡す。

こんなに自信なさげで心細そうな優を見たのは初めてだつた。

観客も、マイクの前で突つ立つている優の不安を感じ取つてざわめき始める。

僕は、思わず大声で叫んだ。

「優！僕らはここだ！早く歌えよ！」

「ユウさん！歌つて！」

続いて叫んだ美咲ちゃんに、僕はギョットとして振り返る。気が付いたら今まで僕の後ろに隠れるようにしていた美咲ちゃんが、最前列から一歩出た所で立ち直りしている。初めて彼女が優に出会った時と同じよう。

彼女にも聞こえたのかな。

優の悲鳴が。

僕は何だかすこしく嬉しくなって、ステージの上の優を見た。

美咲ちゃんに気が付いた優は、喰えようもない穂やかな顔で笑った。心から安堵したその顔は、あどけない子供みたいで、慈悲深い女神みたいた。

やつと自分を取り戻した優は、ギターのネックを握り締めて、マイクに向う。

「ユウです。今日、初めて大事な人の為に歌います。」

意味深なMCに、会場の女の子達がざわめく。

でも、そんなことは優の耳にはもう届いてなかつただろう。

優は櫓の真下で、自分を見上げている小さな女の子だけを見つめていた。

柔らかいアコースティックギターのイントロが始まり、優が歌い始める。

会場は優の声に少しざわめいたが、そのうち口を開く者はいなくな

つた。

圧倒的な歌唱力だった。

幅広い音域。

伸びやかなよく通る声。

それは、疑いも無く女性の声。

空から降つてくる女神のような声だった。

優が歌つたのは初めて聞いた。

その切ない歌声とギターの音色に僕の瞼が熱くなつてくる。  
まさに全身全霊で、誰かを呼んでいる叫びのような歌声だ。

美咲ちゃんは微動だにせず、優を見つめている。

瞬きひとつせず、優の全てを受け止めようと必死で見つめている。

やがて曲は中盤にさしかかり、さつきのモテ男が前に出てきてソロパートを弾き始めた。

こつちも見事なテクだ。

ギターが泣き叫ぶような旋律に僕は鳥肌が立つた。

その時。

マイクを握り締めて立つていた優が、突然、怒鳴った。

「美咲い！好きだあああ！」

美咲ちゃんの周りにいた観客は、一斉に彼女に注目した。

大衆のど真ん中で大声で告白された美咲ちゃんは、顔を真っ赤にし

ながらも、その場から動かなかった。

僕にはそれが、彼女が優の思いを受け止めてくれたように見えた。

モテ男のソロパートが終わって、優が再びマイクを持った。  
真っ直ぐに美咲ちゃんを見詰めながら、優は自作のベタベタバーラードを最後まで歌い切ったのだ。

観客から大きな拍手が起こった。

優は恥ずかしそうに笑みを見せる、ペコっと頭を下げる。  
そのまま前に進み出ると、ピョンとジャンプして櫓の下に飛び降りた。

美咲ちゃんの目の前まで優はゆっくり歩み寄った。

そして、笑つて握り締めた右手を彼女の前に差し出す。

美咲ちゃんも微笑んで、優の手を握り締めた。

その掌に、さつきまで弦を弾いていたピックが渡されたのを僕は見逃さなかった。

その時、茶髪のモテ男がマイクに向つて怒鳴った。

「では、ラストの曲行きます！ オレはここにいる全ての女性の為に歌うから、心配なく！ 夏が終わっても商店街をよろしく！ TABOO 行くぜ！」

モテ男は愉快そうに笑いながら、優にウインクした。  
優は慌てて櫓の上によじ登る。

熱い夏に良く似合つハードロックが、大音量で夕闇をつんざく。

熱狂する人の群れを掻き分けて、美咲ちゃんは僕のところまで引き返して來た。

恥ずかしそうに微笑みながら、掌に握られていたピックを僕に見せる。

真っ白い、大きめの三角ピックには、汚い字でこう書いてあった。

-好きだ チヤンスくれ！-

僕は苦笑する。

優らしい直球メッセージだ。

「どうする？ 美咲ちゃん。」

僕の問いに彼女は笑つて言った。

「こんなのはずるいですよね。カツ」「良過ぎ。悔しいけど、もっと好きになっちゃいました。」

ステージの優が僕らを見つけて、ニヤつと笑つた。

いつもの悪そうな顔で、自信に満ち溢れている。

探していた女の子が自分を受け入れてくれたことを、もう知つているに違いない。

「

誰にも負けない優の高速ギターが、夕闇を切り裂いて響き渡る。

熱くてクールな僕の片割れ。

激しくて、脆くて、どうしようもない我儘な僕の妹。

彼女が歩くであらう前途多難な道を、僕はこれからも追つて行くだろう。

失われた半ピースを取り戻すかのようだ。

ステージで一番輝いている優を、僕はいつまでも見守っていた。

Fin.

32話（後書き）

「」で読んで下せつた方々、ありがとうございました。  
またどこかでお会いしましょう。

(^ ^) -

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2860u/>

---

Gemini

2011年9月25日14時04分発行